
風のたもと ～風の年～

日野 美冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風のたもと　　＼風の年＼

【Nコード】

N6676P

【作者名】

日野　美冬

【あらすじ】

長い空白から覚めた少年を待っていたのは、大切なものをなくした自分と向き合う日々。耐えられなくなった彼は、かつて愛したすべてを置き去りに生まれた国を後にする。「ちゃんと泣きたいだけなんだ」――たったひとつの願いを、叶えるために。

風の前6年 秋 サナ（前書き）

こんにちは。日野です。本作に興味をお持ちいただきありがとうございます。
ざいます。

感想、ご指摘等いただけたら嬉しいです。

風の前6年 秋 サナ

目が、何かを捉えた。耳が、肌が、何かを捉えた。

だが彼は、それからから世界を創りだすことを忘れていた。白という色、石という存在、上下と左右、遠近、朝昼夜の概念、夢とうつの判別、自己と他との境界。自分という存在が、捉えて届けてくるもの。届けられているという事実そのもの。なにもかもを、あまりにも長いこと、忘れていた。

それが自分を取り巻く世界であること……太陽の光、鳥の羽音と人の気配、優しく頬をなでて通る風であること……が、彼には、分からなかったのである。

気付かせたのは、突然与えられた激しい刺激。それに驚いた自分の体がびくりと反応した。そのことに、自分の意識の方が驚かされた。

痛い。

そう理解した時、イルは、自分が世界を取り戻したことに気付いた。目に入るものが人の姿であることに、耳を打つのが意味を持った言葉であることに、気付いたのだ。

「おい……おい、聞こえねえのか!」

間近にある目を見つめる。それはまっすぐに自分を見返してくる。見られていると認識すること、相手の表情から感情を得るということ、ひとつひとつが、ひどくぎこちない。時間をかけて、イルは世界を整理する。手や肩にかかる圧が、相手と触れあっていることを表す。きつくひそめられた眉と細めた瞳、鋭い息のような語調が、やがて彼のやたらな緊張と不安を伝えてきた。

「……ロン」

ほとんど無意識に、その名を口にした。途端、錆つきささくれだった喉を空気のかたまりが逆なでした。咳きこむと、さらに強くかきむしられる。

「イル、だよ」

呼ばれて、涙まで浮かんだ目でその顔を見上げる。潤んだ視界に、相変わらず手を握りしめたままの親友の姿が映る。

こちらの方こそ尋ねたかった。本当に。本当にロンなのか。これは、自分が前に創りだした世界の、続きなのか。ようやく落ち着きを取り戻した喉から、恐るおそる声を出そうとして、しかしイルは口を噤む。

聞こえてくるのとは別の言葉で、彼は思考していた。

何も言えないまま、見つめあうこと数秒。先に動いたのは先方だった。彼は、握っていた手をやにわに引っ張ったかと思うと、そのまま思いうさま抱きしめてきたのである。勢い余り、背中から何かに沈みこむ。ふわりと柔らかい感触と、正反対の刺すような痛み。再び目に飛びこんだ白い石の天井。日差しのおいと、胸や背に感じる他人の存在。耳の後ろでロンが、心の底から絞り出したような声を出す。

「よかった……！」

あんまりたくさんのが一度に流れこんだので、イルはただ目をまたただだけで精一杯だった。すると、閉じて開いた目の前に、また新しいものが映りこんだ。四角い、銀色の何かが。

「お慎みくださいませロンさまっ！」

音の洪水に翻弄されつつあった耳を、甲高い声がつんざく。同時にかーんという固い音が響きわたり、ロンが声にもならない叫び声をあげる。

「ぐずぐずぐずぐずご結婚をしぶっておられたのはそういうわけでしたか！ このような昼日中から、それも抵抗できない身のお方に対してなんたる狼藉！ あまつさえそのお方は、ご自分と同じ男性でございますよ！ あなたさまの性的ご嗜好にもの申し上げる気はございませんが、事前に明確な了解もなくそのような不毛の道にご友人を引きずりこむような真似をなさるとは！ 四方八方ありとあらゆる方面から見ても最低でございますっ！」

ものの言いに反してどうにも幼い声が、流れるように言い切った。

ロンはイルに覆いかぶさったまま、両手で頭をおさえて小刻みに震えている。身動きがとれないのでどうともしがたいが、横目にうかがうと、笑いを堪えているか、痛みを堪えているかに見える。

だいじょうぶ？

その言葉がどうしても思い出せない。変だ。彼らの言っていることは分かるのに。

「……てんめえ、キト！」

頭の後ろをおさえたまま、ロンががばっと体を起こした。

「なんびやっぺん言わせんだ！ そのぶつとび過ぎの妄想癖と鉄板の角で躊躇なく人の後頭部強打する癖なんとかしろ！」

「妄想とは心外でございます！ 事実から客観的に判断した真実です！」

「だからってカドで叩くのか、カドで！ 死ぬわ！」

「あーっ、お認めになりましたわね。その不埒、己の欲に負けた業。まさに万死に値します！」

「認めてねえっ。たとえばほんとだって、そんなことで殺されてたまるかっての！」

「暴論甚だしいことですね！ そういうやる側の軽い気持ちが行われる側の心と体をどれだけ傷つけるか少しはお考えになったことがありませんか！」

「ああもう、やめてくれ！ なんかお前が言うといちいち生々しいっ」

単語を追っている内に、体がふと身を振った。自由になったことを主張したのかも知れない。

そろそろと、身を起こす。

イルはようやく、自分が寝台の上に座っていることを把握した。すぐにはどこかは分からないが、窓際の明るい場所だ。

腹の横に片膝を立てたロンの向こうには、声のとりの小さな少女が見える。体の割に大きな靴、大きな手にはロンを撃破したらし

い鉄板、反対の手にも同じ材質の皿のようなもの。くるくる巻いた短い頭髮の間からは、鈍色の瘤のようなものがのぞいている。まだ小さいが、角だ。

少女はイルが起き上がったのを見て、大きな目をさらにまんまるにした。

「……まあ」わずかに染めた頬を、鉄板で覆う。「同意の上でございましたのね。失礼いたしました」

「ばか言ってるな」呆れ返ってロンが言う。「いいから……あーもう、なんだっけ。そうだ。みんなに知らせてこい。俺はこいつに付いてるから。ああそれから、なんか、羽織るもん」

「承知いたしました」

少女は手早く板の上に皿を乗せ、それをまとめて小さな卓の上に置いた。それからぴよこりと一礼し、

「くれぐれもご無理をなさらせませんように」

「さっさと行け！」

少女が辞すと、そこは、急に静かになる。

ロンはこちらを見下ろし、苦笑をもらした。

「ああ、ごめんな。びっくりしたろ。あいつ、いつもああだから。気にしないでいいよ」

半端にうなずいて見せる。返事すら出てこない。いったいどうしてしまったのか。

「だいじょうぶか、お前」ロンがふと顔を寄せた。「まだ顔色悪いな。横になってろ。いろいろわけ分かんねえだろうけど、落ち着いたらちゃんと説明してやるから。な」

言われていることが分かれば分かるほど、ますます分からない。動揺を押し隠そうとするように、イルは胸を押さえつけた。音と光の怒濤が去って、自分の内側に意識が戻る。瞬間、どきりと心臓が打った。

その衝撃に押されるように、やっとひと言、言葉がこぼれる。

「……つめたい」

「あ？」

ロンは一瞬、分からないと言うように眉根を寄せ、すぐに、ああ、とうなずいた。

「冷えるのか？ あいつやることおっせえからな。戻ってくるまで、これでも着てろ」

そう言っ、自分が着ていた上着を肩にかけてくれる。薄手の布の感触に、人の体温の温かみが確かにあった。けれど。

「冷たい……」

胸の奥が、信じられないほど、冷たい。

「なんだ、これ……？」

まるで、むりやり抱かされた永遠に溶けない氷のかたまり。どう足掻いても取り除くことのできない、絶望的な痛み。そして、たったひとつ残された、誰のものかも分からない温もりの記憶の、ぞっとするほどの甘さ。

心もとなくて、イルは、着せかけた上着をなおそうとしたロンの袖口を力任せに掴んだ。それでさすがに、ロンにも、イルが訴えているのが単なる肌寒さではないことが分かったらしい。

「どうした」

イルはただ冷たいと繰り返した。ロンは黙って荒っぽい手つきで背をさすってくれた。だがそれで、イルの動揺ははっきりとした形を持った。

親友の純粋な気遣いさえ、冷えきった最奥には一切届かなかったのである。

「やめろ……」

口が眩くと、手が手を払いのける。その激しさに触発されて、叫ぶ。

「触るな！」

手を払われたロンからは、なんの言葉もなかった。背を向けてしまったからその表情を見ることはできないが、驚かせたのは間違いない。

なにしろ自分が驚いているのだから。

何してるんだ。何を言ったんだ。自分に問いかけるごと、ますます焦りが強くなる。

イルが長い空白から逃れて戻ってきた世界は、紛れもない続きの世界でありながら、一番大事だったものを欠いていた。不吉に脈打つ冷たい鼓動の内に、彼はひとり放り出された。

風の前3年 秋 ソロワ 〈小悪党の受難〉

人間は社会の規則に則って日々自己の欲求を封殺しているものだとする。

規則というのが、あまりにも多数の人間に当てはまるように工夫しすぎ、かえって誰にもぴったり当てはまらなくなったものだとする。

さてこの世の中で、いったい誰が心から満足して生きていけるだろうか？

「だから人間はいつでも満ち足りないんだって、じいちゃんが言ってました」

「ああそう」

むくつけき男どもに拉致された小さな少女が高説を垂れ、男どもに囲まれた青年がどうでもいいと言わんばかりの軽薄な返事をした。明るいい日差しの下、地元の人間で賑わう商店街の路地裏で、彼はまさに少女と金品の交換交渉を持ちかけられたところである。ありていに言えば、金目当ての誘拐事件の被害にあっているまっ最中であつた。

「この方々も、満ち足りない何かを持て余して手始めに金銭的満足を追求しているのではないかと」

「かもね」

にも拘らずどちらにも緊張感がないのには、さしも場慣れした悪党どもも閉口している。何しろこの少女、青年と顔を合わせた途端にこの調子で談話を始めてしまったのだ。大通りの方からは、何事かと野次馬する町人たちが幾重にもなって覗きこんでいる。被害者と思しきふたりが人間の社会性と欲求の均衡について語るので、野次馬は大事でもないのかと半端な息を吐く者とただ者でないと固唾を呑んで見守る者とに大別された。

「ですからきつと、性根の悪い方々ではありません。むしろ心の底

から哀れんでなければしの金一封でも」

「お嬢さんよ」

少女を小脇に抱えていた者が、たまりかねてがらがらした声を挟む。日頃からこうした悪業で食っているのか、身嗜みへの気遣いはどこにも見えず、汚れ敗れた袖から伸びたぶつとい腕は垢染みて、他の男らの多くと同じくあらゆる体毛が伸び放題である。

「俺たちの哀れな境遇のご説明は結構だからよ、ちよいと静かにしてておくれでねえかね。おじさんはあの人と話があるからな」

奇妙にあやすような声音を、よほどませた感嘆がまっこうからばかにした。

「ああいやだ。これだから教養のない力任せの人種って長生きしないのよ」

「あんだとう？」

男、途端に顔面を醜惡にし、無闇に声を荒らげて無教養を露呈する。

「優しくすりゃあ、この化け物」

「あらまあ！　ねえ、化け物の定義をご存知？　角や尻尾がそうじゃないのよ。みんなが普通分かるのになってことが全然分らない人間のことを化け物って呼ぶの。つまり、あんたたちよ」

「こい、つ」

「だあってねえ。あたしたちのこと、よくご覧になって？　何と交換だろうと、お金が出てくるように見える？　いい。犯罪に手を出すのはばかよ。いくらあたしが捕獲しやすそうで、あの方が見た目、飽くまでも見た目、優しそうで力もなさそうだからってね、実入りの期待できない犯罪をやるのは大ばかよ。おまけに見立てが大間違いじゃ、大ばかの上にもうふたつぱかり大だいの字が必要だわね。人の力量も見極められないのに危ないことするもんじゃないわ。その上あたしが一生懸命、あの方を説得しようとしてあげてんのに、あんたあたしを黙らすの？　大ばかの上に大を重ねてまぬけとんまを添えなきゃなんないわ、やれやれ」

自由になる首を左右に振って大いなる嘆きを表現し、少女の口がようやく止まる。男は言葉を失っている。彼らは日頃人から恐れられる存在であって、こうまで言いたい放題やつつけられたことがないのに違いなかった。が、いくら口が回っても、胴の太さが男らの腕の太さほどしかない小さな少女のこと、彼らが驚愕を通り過ぎて我に返ったならばどんな目に合わせられるか分からない。

しかし、誘拐犯どもがなんらかの行動を起こす機会は訪れなかった。

「……お前は」

渦中の青年が先に口を開いたからだ。

「少しはしおらしくできないのか！」

それも、ほっそりしたその立ち姿からは想像もできない怒声であった。見物人ばかりか誘拐犯たちも、思わずびくりと肩を引く。

「口開けば人の神経逆なですることばかり言いやがって、怒らせて面倒にしてなんのいいことがあるんだよ！　そもそもあっさり誘拐されんな！　嫌がらせか！」

「心外でございます！　わたくしがかわい女の子なのは百も承知で置き去りになさったのはいったいどこの誰で」

「お前がのこのこ離れて歩いたんだろ！」

あまりの怒気が、滔々と水の流れる立て板そのものをぶった切る。「おい誘拐犯。言っとくけどそいつがどうなったって知ったことじゃないから。金が欲しいなら売り払ったら。じゃ」

かと思うと始める前から交渉決裂を宣言し、本当にくりりと踵を返す。商店街と野次馬には背を向けた方向にさっさと歩き去ろうとするのを、囲んでいた男たちが間を詰めて押しとどめる。

「そりゃあ冷たいんじゃないの、兄ちゃん」

「お連れさんなんだろう？　それもあんな年端もいかない」

「連れ？」

その言葉は、何故かもっとも青年の癪に障ったらしい。立ちほだかった男たちはすごい目で睨まれてたじたとする。徒党を組んで

悪事を働くくらいだから、皆それなりに体格には恵まれている。同じ高さから睨まれるというのも慣れない経験に違いなかった。この青年、誘拐を企む悪党から反撃の恐れなしと判定されるほど痩せているのに、背ばかりずいぶん高いのだ。

「あんたらがそんな社会倫理みたいなこと説くの。だったら言うけど、町歩いてる女の子捕まえてお金と交換とか、しちゃいけないと思うけど」

「……いけませんよ」

打って変わって静かに、しかし嵐の前の静けさめいた恐ろしい気配を帯びて青年が言葉を接ぐと、どういうわけか巨漢に囚われても微動だにしない胆力を持っているはずの少女が震え出した。

「それにね、世の中、言っているいいことと絶対言っちゃいけないことがあると思うよ」

「駄目ですからね」

「あんたらも毎日厳しいんだろうけど。辛いのは自分たちだけなんて、考えはじめたら人間終わりだよ。ちょっとは人のことも思いやらないとさ」

「駄目ですってば」

「金を出せって？」

青年が、首から膝までを覆っていた長旅向きの外套を、突然肩に払う。少女が悲鳴を上げる。

「いけませんったらーっ！」

「黙ってろお前は！」

青年が腰に帯びた剣を取ったのと、正面を塞いでいたふたりが伸ばされたのと、どちらが先だったのか。その場にいた者で見極められた者はない。

「金がないのはこっちだよ！」

予想外の實力を行使して見せた青年は、二撃で仕留めたふたりに背を向け、にわかには身構える残りの敵に対し、

「金欠の人間に対する礼儀ってもんを叩き込んでやる！」

完全な八つ当たりを決行した。

誘拐犯たちは、ようやく現実を受け止めた。今日の獲物は、人に害成して糊口を凌ぐ自分たちよりも、よほどろくでもない人間だったのだ。

少し後。被害者から加害者に転じ野次馬たちの英雄で終わった青年と少女は、目抜き通りから離れに離れた場末まで逃れついていた。あの男たちは町でも煙たがられている悪党の一団だったようで、全滅の恥を満天下に晒させた外来の剣士には喝采が浴びせられた。振る舞い酒の申し出を断ること数十回、ようやく逃げ切ったらこんな場所にいた、というわけだ。

走りに走ったふたりはしばらく両膝に両手をつけて息を整えた。その内、喘息とは違った長い息が漏れた。

「はあ……」

町の英雄は汚い道端にしゃがみこみ、帯から外したままの剣の柄に両手をかけて、項垂れていた。

「やっちゃったよ……」

「お止めしましたからね。いちおう」

少女が腕を組んでそれを見下ろす。彼女は背丈に比して手足が大きいので、左右にどん、どん、と手が突き出して、腕を組むと言うよりは腕を結んだみたいな様相を呈している。

青年が顔を上げると、しゃがんでいるのに突っ立っている少女と目の高さがぴったり合う。

「ねえキト。ぼくは何か勘違いしてるのかな。こんなわけないよ。ぼくは都じゃ周りの誰にも勝ったことなかったのに」

「はあ」少女は呆気である。「聞かれましたから言わせていただきますが、皇帝のお抱え剣士の皆さまと片田舎のごろつきとでは、月とすっぽん、雲泥万里、まさしくじいちゃんの角とわたくしの角を比べるようなものでございますよ」

そして出来の悪い教え子をからかう教師のように、頭のとっぺんの瘤みたいなものをちょいちょいとなでて見せた。鈍い金属質の色味を帯びた巻き毛の間からのぞくそれは、紛れもなく彼女の角だ。

「傍目には、勝負にならないのは明白でございました。だからあの方々は“化け物”だと言うんです」

「ああそう……」

まったく参考にならなかった、という顔で暗澹たる返事をし、青年はのろのろと立ち上がる。

「まともに取り合っていらっしやいませんね？」

「すいません。お前に聞いたのがばかでした」

棒読みで言いつつ、剣を締めなおす。剣は持ち主同様細身で、薄桃色の金属でできた鞘に納まっている。彼は白昼の不屈きものを叩き伏せた時でも、この鞘を取らなかった。何しろ、赤い棒鏢と、柄、刀身を覆う鞘が織りなす十字は、敢えて外そうとしない限り決して外れないよう、鞘側にくくりついた革紐でぶっちがい括られて、金属の釦で止められているのだ。

「もう誘拐されないでよ」

「了解しました」

外套の前を合わせ、身支度が整うと、青年は高い視点から周囲を見渡した。でたらめに走ったので、すっかり居場所を失ってしまった。ともかくも、現在地を把握する必要がある。でなければ探すものも探せない。

「じゃ、行こう」

声をかけこそすれ、不本意な連れの返事を待つことはない。青年が踏み出す方向に、少女が決死の様相で付き従う。彼はまた、開きのありすぎる互いの歩幅を考慮することもないのだ。

青年の名は、イル。旅の途中である。

風の前3年 秋 ソロワ 〈旅人の受難〉

町はいやに歪な形をしていて、人で賑わう一画と閑散として貧しい一画とがずいぶんはつきり別れていた。ふたりが迷い込んだのは殺風景な後者に属する区域であり、誘拐にあったのだから傷害事件を起こしたのだか、なんにせよひと騒ぎしてきたのは前者の中心地である。あちらに比べ、こちらは人影がなく、心なしかひんやりとしている。そのくせ人の気配ばかりがそこからするから、皆家の中や物陰でいじけているのだろう。すえて埃っぽく、反吐か残飯のようなものがぶちまけられていたりもして、不潔である。

だからと言って繁華街の衛生管理が万全だったかと言うと、そうでもないことをイルは見抜いていた。

あちらは、清潔であると言うより、人も建物もまだ新しいのだ。

「あとう」

従って古い部分も打ち捨てられて久しいわけではないのに、巨大で緻密な蜘蛛の巣を一枚ばさつと被せてでもあるようだ。しかし、造りをよく見れば基礎から立派な代物であるし、区画はよく整理され、町作りの計画としてはこちらの方がよほど高度であることが窺えた。

「あとう、イルさま」

ここまで作りこんだ町を……多少の住人は残しているらしいが……ほとんど放棄してあると言うのは、どうしたわけだろう。路肩の観察の結果イルがそんな疑問に達した時。

「重大なご報告がございますので聞いていただけませんでしょうか
イルさま！」

「……なに」

十歩も後ろからキトが喚いたので、イルは背中で返事した。いかに駄弁著しい彼女であっても、十回無視してなお主張がある時は本当に重要な報告のある時である。

「大変申し上げにくいのですが」

「じゃあいいよ無理しなくて」

「優しさの皮を被ってシカトなさるのはやめて下さい」

やっと聞く耳を持ってもイルは足を止めない。キトは息を切らし、短い足の先の大きな革靴をどたばた動かしながら、声を張り上げる。

「わたくし、荷物を取られたままなのです」

「え？」

「荷物を取り上げられたぎりなんです！」

イルはあっさり足を止めた。

「誰に」

「先ほどの壮士の皆さまに」

「何を」

「一切がっさいですよ。ポーチごと取られてしまいましたので」

なるほど、人をさらったら金と取り換える前に身ぐるみ剥いで確実にひと儲けというわけか。実に理にかなっている。人さらいとしての嗜みと言っているだろう。がしかし、換金交渉相手にぼこぼこにやられてしまえば、その利益は丸ごと無に還って然るべきではないのか。

「なんでさっき取り返してこなかったの」

「イルさまが町の方々からものすごい勢いでお逃げになりましたので」

キトは悪びれる様子もない。

「あまり離されて見失っては元の本阿弥と、急ぎ追って参りました」
明快な説明にも拘らず、イルは悩むように片手で額を覆った。

額の奥で、キトの持ち物を思い返す。彼女は体の大きさに見合った体力、腕力しか有していないから、ほとんどの荷物はイルが背中にしよっている。キトの小さな肩掛けポーチの中で管理されているのは、万一はぐれた時のための少量の生活物資、そしてキトが力の代わりに有している様々な専門知識をもって扱う荷物……少々変わった葉草である。

イルは額から移した手で、疲れた目を労るように眉間を揉む。

「健闘を祈ってるよ」

「無理です」

言外の奪取命令は即座に拒否された。はぐれて十分後には人質として現れたキトに、本当に荷物を取り返して来いとはさすがのイルでも言えないので、黙って受理する。

薬草店は市場のあるところにはたいがいあるだろうが、必要な薬草を置いているかどうかが店の格に大きく左右される。首尾よく見つければあとは金の問題になるが、金策疲れの激しい昨今、不測の事態でさらにその必要に迫られることの鬱陶しさと言ったらない。

「なくても問題ないんじゃない」

「そこはおおいに困るのが普通でございます」

訂正されたので別の道を模索する。模索すると言っても、なくて困る、入手せねばならない、新しく手に入るか分からない、あっても金を出し難いとなれば、道はひとつしか見当たらなかった。

イルが誘拐犯の元に出向いて、取り戻して来る他ない。

「最低」

「そうですか」

「最悪」

「他には？」

「……面倒くさい。関わりたくない。ほんとに勘弁してよ。だからいやなんだお前というの」

「最後以外はおよそ共感いたします。至極まっとうな感情かと」

極めて淡々と所感を述べ、キトはイルの次の行動を待つ。

「……まだあのへんにいるかなあ」

「そうですね。ああいった手合いは普段複数の集団に別れて適宜活動していますが、元締めを冠していることが多いです。恥ずかしながら捕まえられておりました時、組織人らしい会話を耳にいたしましたから間違いありません。となると、人前であれだけの大敗を喫したとあらば、組織の規律を守るため見せしめの仕置は必至。今ごろ、血眼になって埋め合わせを試みているものと思われそうですね」

「つまり、どういうこと？」

「目抜き通りでも歩いていらっしやれば、あちらの方から名乗り出てきて下さるのでは、と」

「それって」イルは情けない顔になる。「あちらさんはやる気満々、てこと」

「はい」

イルは無意識の内に外套の上から剣の柄に触れ、建物と建物との細い横道に視線を走らせた。誰もおらず、何もないのに、なぜかさっぱりとしない道だ。

今から先ほどの場所に戻るのは気が進まなかった。目当ての集団がやって来てくれるのはいい。百歩譲っていいとして、まいたばかりの町人たちがどう出るのが気にかかる。が、背に腹は代えられない。

「じゃあ、さっさと済ませてくるから」ため息ついでに言葉をこぼす。「どこか目立たないところで目立たないようにしてて」

「またわたくしを置き去りにするおつもりですか！」

「だってもう分かったら？ 賊のところにお前つれて行ったら、また狙ってくれて言うようなもんだよ」

現に誘拐の憂き目にあったわけである。それも町に入って一刻も経たぬ内にだ。はぐれたところをさらったにも拘らず、的確にイルのところを金を請求に来たのだから、一緒にいた時分から見張られていたことになる。目をつけられたのは、足を踏み入れた瞬間と言っている。

日常的に網を張って得物を探している犯罪者集団の存在。ここはほとんど無法地帯だということだ。

「ぼくのところに請求が来ただけ幸運だったんだよ。これじゃそのままだに詰められてどこかに売られてたっておかしくない」

そんな世情にも今さら気付いたくらいに、彼らは異邦人だ。

「はあ。そう言ったら妙ですね。貧乏人から搾り取る身代金より人身売買の利益の方が絶対お得そうなのに。なんでわざわざ盗んだも

のを持ち主に見せびらかすようなことを？」

自分で自分を珍品のように言うキトに、イルは不快そうに知らないよと返した。人さらいの事情など、知ったことではない。

「じゃ、行ってくる」

背中に淀んだものを背負ってイルが去ろうとすると、

「あまりご無理をなさいませんですよに」キトは日の高さを目測しながら、不意にそんなことを言った。「まだ余裕があるかとは思いますが、一戦交えた後ですし」

「分かってる」

イルはその言葉を片手で邪魔そうに退けた。せめてこの貧民窟の住人たちが、生活態度同様、犯罪に対しても消極的であってくれることを祈りつつ、ひとり目抜き通りへ舞い戻る。

風の前3年 秋 ソロワ 恐怖の大通り

キトは種族の特徴が埋没を許さないが、ヒトであるイルもまた人目を忍ぶにはなかなか向かない見てくれをしている。まずどこへ行っても彼より目線の高い者がいない。それに釣り合わず、手足も胴回りも細い。十年日差しを浴びなかったような、いっそ不健康とも言える肌色をして、色の濃い瞳の大きな目許をより印象的にしている。がっしり座った骨格とてらてら光るほどの日焼け肌の集団に混じったら、黒羊の群れに白羊を一匹放り出したようなことになってしまう。

「あんた、さっきの」

当然の帰結として、イルは三秒目で捕まり、

「人違いです」

四秒目には逃走した。

歪な町の大市場は、古い町の母体に巢食う巨大なできもののよう
に広がっている。幅広の道の両脇を、延々と店屋が塗りつぶしてい
る。生きたままのウサギから捌いてある動物の肉、青菜に果物、穀
類豆類から、酒、煙草、反物、刀剣や矛や斧なんかの武具に馬具、
馬車、馬車馬……イルはこの店だけは避けて通る……薬もあれば書
物の類を並べているのもある。その間をひしめきあう人、人、人。

その熱気は、イルに育った国の商人街を思い起こさせる。

だからと言って、彼は懐かしさに浸ったりはしない。

「あれえ、兄ちゃん、先だっつの」

また十秒も歩かぬ内に声がかかり、イルは早くもうんざりした。
いったいどれだけの人間がああ騒ぎを見物していたのか。道いっぱ
いにあふれる人山の何分の一にもならないだろうに、なぜこうたっ
たひとりしかない自分とがちり鉢合わせるのだろう。

「やっぱりそうであっはっはー。強えんだなあ、あんた。久々にす
かつとしたぜえ」

さらに悪いことに、今回イルを見つけてきたこの男、昼間から酔っている。

「なあ、あんた外^とつ国^{くに}の人だろう？　こっちへ来たのは武者修行かい？」

外つ国とは山と森を越えて北側にあるふたつの国を指す。イルはそのひとつ、東側の国から南下して来たわけなので、男の推測は間違っていない。わざわざ正解と伝えてやる義理もないので、言わないが。

「なんだい、無愛想なんだな。さっきも賊どもを伸したのの三倍くらの韋駄天走りであつという間に逃げ……」

「その賊どもを探してます」

酒の上の喃語を並べ立てる男に対し、イルは道のまん中で凶器を突きつけるという暴挙に出た。もつとも、こんな時間から誘拐の起こる町のこと、鞆のままの剣を見せたくらいでは人々はちよつと驚くだけで素通りしていく。

「行方か、たまり場か知っていたら教えてください。知らないんなら消えろ」

「……おーおー」酔っぱらいは反射的に引っ込めた喉の下に二重あごを作った恰好で、ぜいぜいと笑った。「威勢のいいこった。いいねえ、若いってな自由で」

鞆の先を突き出た喉仏に当ててやって、イルは剣を握った右腕をさっさと外套の下へ引き戻した。軽い凄みで引かない相手を、それ以上脅しつけるのは無駄というものだ。

「おいおい待て待て。なんつー短気な兄ちゃんだよ」

せっかく見逃してやろうというのに、酔っぱらいは酔っているゆえかしつこく追ってくる。

「最近の若者の傾向ってやつかあ？」

「……あんた」人ごみをかき分けて進みつつ、イルはちらりと流し目を与える。「俺のこといくつだと思ってる？」

「そうだな。じゅーう……」

皆まで言わせるまでもなく、その時点で男の処遇は決まった。イルは外套の内側から肘鉄の要領で真後ろに鞆先を叩き込んだ。それはぴたりとイルの背後についていた男の、ちょうど鳩尾に嵌りこむ。酔っぱらいは酔っぱらいらしからぬ必死の奇声を上げた。今度は明らかな障害行為だったからだろうか、周囲の人が暫時退く。

「残念。二十までは許すことにしてる」

冗談気の欠片もない声をぶつけ、今度こそ別れようとしたが。

「かーっ」

男は謎の気合いと共にさらりと復活した。

「なるほどな。その速さと狙いで一撃必倒てわけだ。あの人数相手にその細腕とおもちゃみたいな武器で、よくやるもんだよ」

「次は本気でやるよ」

いらぬ言葉の連発に、とうとうイルは往来に逆らって足を止め、
颯^{ひんしゅく}颯^{ひんしゅく}を買いながら平然と主張した。

「ついて来ないでくれっていうのが分からないかな。今取り込み中なんだ、あんたに付き合ってる暇がない」

「だから“雨の恵み同盟”の荒くれどもを探してんだろ？」

「何その不吉な名前の団体……」

イルは雨が嫌いだ。晴れも同様だが。

「あんたがぶちのめした小悪党集団の大元さね。地元のもんならみんな知っていらあ。根城も元締めもみんな有名だ」

一撃が気付けになったか、酔眼が多少はつきりしている。でまかせではなさそうだ。

目線は等しいが横幅が大いに異なった男の風体をひととおり見回して、イルはしかしちよっと目を眇めた。白昼酒精を漂わせる素行も併せて考えると、このいかにも安っぽい、下着のような身なりは遊びのつけの結果だろう。すると恐らく、情報をただで渡すような真似はすまい。自慢じゃないが、金はない。

「よく分かりました。ありがとう。他の人に聞いてみます」

「ああっ、ぬかった！　嘘！　俺しか知らん！」

男があんまり懸命に引き止めようとし、しまいには腕を掴んできたので、いい加減警戒を露にして威嚇した。

「なに、なんか用でもあるの？ 恐喝なら他をあたってよ」

「そう邪険にしねえでくれ。用って用でもねえんだが、ほらよ。なんつうか、な」

ごまかされればそれだけ不信は募る。イルの表情がいよいよ険悪になったので、男は慌てたように腕を捕まえっぱなしだった手を放し、それをぶんぶん左右に振る。

「分かってる。分かってるぜあんたが何を懸念してるか。何も情報料せしめようなんて思ってたねえから安心してくれ。もちろん追い剥ぎでも物乞いでもねえよ」

「じゃあ、なんなの」

「あんたに惚れた」

絶句。

通りに舞い戻って三分と二十二秒目、イルは自分がせき止めた人の流れを押し退け、全力の遁走を試みた。結果は失敗だった。

「ほんとに勘弁してよ……」

キトは疫病神の子孫なんじゃないかと本気で疑るイルのため息は、五分の大台にも乗らぬ内にあれよと連れ込まれた飲食店の卓上に落ちていた。この酔っぱらい、改めマスクは、ここ一帯の飲み屋の位置と込み合う時間帯およびうまいものが入ってくる周期を、完全に把握していると見えた。

「な、あんたの名は？」

「言わない」

「なーんだよ、俺は言っただぜ？」

「勝手に名乗ったんでしょ。しかも全然外見と合っていないよ」

奇妙に奥まって、衝立や観葉植物などで衆目を遮ってあるみたいな小さな席で、イルは自己紹介を断固拒否している。明るい窓際はそれなりに繁盛しているようだが、薄暗いこちら側には空席も多く、どんなに声をひそめても名乗った途端にそこら中に自分の名が広ま

ってしまいそうな気がした。

捕獲された上ゆっくり話をさせてくれと言われ、ゆっくりしている暇もないのに従わざるを得なかった。イルはマスクの読んだとおり、速さとの確さを駆使して超短時間でけりをつけることによって勝利を得る。そんな戦法を取るのは他でもない。そうでないと命に関わるからだ。今回も、これ以上逃げ回ってこの男との追跡劇を長引かせるのは非常に望ましくないと判断するに至り、ここにこうしている。

「何を食う？」

「何も」

「酒は？」

「飲んでもいいけど後のこと知らないですよ」

こんなに関連なくしているのに、マスクはにやにやこちらを見つめてくる。馴染みらしく店員を呼びつけ、自分の注文ばかりしてしまうと、

「いやあ、気持ちいいほど態度悪いなあ、あんた」

連れないのをいっそおもしろがっていることが発覚した。

これは自分がさっさと主導権を取って、場を展開してしまった方が早い。イルは不本意ながら、とてつもなく不本意ながら、まったく向かない仕切りという役所を引き受ける。

「それで？ ゆっくり何をお話するんです？」

「お急ぎだねえ」酒飲みのくせに、こちらの魂胆を見透かしたように言う。「そりゃあもちろん、あんたのお探しの賊集団についてさ」

「だったら外でしてよ」

「それが外じゃできねえのよ」

ふいに柄にもない小声をするのを、イルはまっすぐ睨み返した。町中の知るところである話を道でするのが、なぜまづいと言うのか。当然の疑問は察しているだろうに、マスクは、店員が頼んだものを全部運び終えて誰か来る気遣いのなくなるまで、話を切り出さない。

「雨の恵み同盟てのはな」

本日何杯目なのか、茶色っぽい酒を口に含みつつ、ようやく話出す。

「あ。あのね」が、イルはそれを片手で止めた。「そいつらの主義主張とか、どうでもいいんです。居場所だけ教えて」

「あんたって興味ないものにはとことんだな」相手はやはりおもしろそうにしている。「そんなんで、なんだってあいづらを探してるんだい？」

「ものを盗られた。ないと困る。それだけ」

「なるほど。確かに葉はなきやあ困るな。それもあんな高級な呪い^{まじな}草、残念ながらこの町じゃ手に入らん」

二度目の絶句。

「俺についてきて正解だろ？」

マースクはその様を肴にもうひと口酒を飲み、安い肉料理に手を付けはじめる。イルは気持ちを落ち着けるべく、敢えて奇行に及んだ。こちら側に置かれた男の杯を奪い取って、一気に飲みこんだ。

そうした無茶が嫌いでないのか、酒を奪われた方から小さな笑い声上がる。

「なんだ、飲めるんじゃないの？」

「そういう横流し品でもあったの？」

「いいや、まだ流されちゃいねえ、と言うより」

茶々には取り合わないイルにも、まったく不快を示すことがない。

「流す予定がねえ。抱え込んで取り返しにくるやつを待ってる。持ち主に用があるみてえだな」

「あんた、何者？」

「お、ようやく俺に興味を持ってくれたかい」

飲んだくれの素性になど興味はない。ただ盗品とその行方に詳しくすぎるのだ。一番簡単に考えたら、彼はナントカ同盟の一員に他ならない。

「だからよお、それを分かってもらうには、同盟の主義主張を聞い

てもらわねえとはじまらねえのよ」

「じゃあいい」

イルは即断した。

「あんた。もうちょいとじっくりものごと考えた方がいいぜ」

「かもね」軽い苦言には肩を窄める。「で？ 居場所は教えてくれるの」

「いやあ……」

マスクはここへ来て渋りだした。

「何も知らずにつつこんでくのは勧めらんねえよ？」

情報を得られないなら用はない。正体が怪しい分、関わるだけ損だ。それにこうして酒まで酌み交わしてやったのだから、そろそろゆっくりお話もし終えたとされて然るべきだ。

「じゃあ、ごちそうさま」

ほとんど一杯飲み干したものの、勝手におごってもらうことにしてぺっと舌を出す。重ねて言うが、金はない。

「ほんとに行くのかよ！」

「おかしなものに巻き込まれたくないんでね」

「もう巻き込まれたも同然じゃねえか」

「うるさいよ」現実なんか見たくもない。「だからさっさと抜け出したいんじゃないか。手を貸さないなら邪魔しないでくれる」

「……まあ、いいや」

マスクは乗り出していた身から燃料切れみたいに力を抜き、へし折りそうな勢いで背もたれに倒れこんだ。

「筋金入りの短気だ。あんたの用が終わってから出直すとすら」

また会おうとしているような言い草はおおいに気になるが、いち構っていたらいつか本気でこの男の急所を狙ってしまいかねない。イルは早足に、連れ込まれた店を出る。

暗がりから出ると、晴天の下の賑わいはいつそう眩しかった。男は思いの外、本当に引き下がったようで、ついて出てくる気配はない。安心したような気の抜けたような息ひとつ、店先の日陰に入っ

たままです。どうしたものかと思案する。

マスクの言ったことが全部真実だったとしてみる。あの、それこそ飲んだくれに毛の生えたみたいな悪党の集団は、なんとか言う名の知れた組織の末端で、彼らの戦利品は既に上に渡っている。上は盗品を金に変えずに持ち主との接触を図っている。その理由はいくつか想像できる。単に金に変えられなかったか、まだキトを狙っているか、はたまた、イルへの報復を自陣で執行したいだけか。どれでも構わないが、するとちょっと困ったことになる。

キトはあちらがこちらを探しているだろうと踏んだが、それが怪しくなるのだ。

彼らは探すのではなく誘き出そうとしている。自分たちの居場所は軽く情報収集すれば知れるから、さあ来いと言われているのである。要するに、適当に人を見繕って、敵の居場所を聞き出さないとならない。先のマスクのように怪しいところのない、いかにも一般人然とした、情報だけを提供してきれいに消え去ってくれるような人を。

「しかし」イルはいろんな想いの籠ったため息をつく。「雨の恵み、ね……」

晴れ渡った空に、その響きはいやらしい予感を孕んで滲んで消える。

「あとう、ひょっとしてさっき、その路地で」

「あ、はい」

「やっぱり！」

次に話しかけてきた野次馬崩れにイルが笑顔で対応したのは、それが女性だったからでは決していない。彼女がたまたま、イルに笑顔を作る心の準備が整った折柄現れた、幸運の人だっただけのことだ。

風の前3年 秋 ソロワ 〈少女と化け物通り〉

一方そのころ、貧民窟。

「まあ、なんだろうこの辺は」

キトの駄弁は特に聞き手が必要としてはいなかった。

「いくら貧しくたって、これじゃあ野宿した方が広々するだけましってもんだわ」

彼女はイルの言い付けに従い、目立たない場所を探してイルとは反対の方向に歩いてきたのだったが、灰色に沈みながらも重厚で歴史感のあった町並みが途中から本当の廃墟と化した瞬間、目的を忘れた。なんとたつて廃墟である。この一画にだけどんどんぱちぱち、局所的大空襲でもあったかのごとき破壊がそこかしこにある。やはり根が頑丈な建物なのか下手に柱や壁が立ち往生して、空恐ろしい物陰が何重にもなって道沿いに延々続いている。キトは本当の戦場に行ったことはないけれども、これを見て恐怖するくらいの知識なら持ち合わせていた。なんだか今しも、あっちの梁の残骸の下から悲惨な重傷を負った誰かが呻き声をあげそうだ。もしそんなものに出くわしたりしたら。

「……治療するわ」

少女は己の本分に立ち返り、

「でも薬も道具もないんだった!」

剣士の丸腰に等しい己の状況を再認識した。

ところで、がらんどうの廃墟で一人芝居を惜し気もなく披露し、物珍しそうにきよろきよろ頭を動かしている、角の生えた女の子というのは、大変衆目を集めやすい。彼女の周囲には幽鬼めいた怪我人の代わりに好奇に満ちた見物人がさわさわと集まってきた。キトは生まれも育ちも都会であったが、血脈によってもたらされる鋭い勘は健在である。ヒト風情が身を潜めたくらいでは、隠れた内には入らない。

「なにを見てんのかしら」

彼女の目は彼らの存在は見抜いても、自分を客観視することはなかった。

数人ばかりの集団がいくつかいて、中にさかんにひそひそ話をしているのがあったので、耳たぶの傾きを調整して聞いてみる。

「やっぱり、ほら！ 化け物通りに入ったよ」

まだ高い、子どもの声だ。

「じゃあほんとに？」

「でも、なんか初めて見たみたいなこと言ってる」

「だから、まだ来たばかりなのさ。これからあいつらと契約を結びに行くんだ」

「けいやく？ それなあに？」

「決まってる。呪いの契約だよ！」

ひとりがおどろおどろしい……そうしようとしたに違いない……声で言うと、周りのやはり幼いらしい声たちは大盛り上がり。隠れる気のあらばこそだ。

「ねえねえ。じゃ、みんなに教えてあげないと」

「そうだよ。町が全体呪われちゃってからじゃ遅いもの」

「みんなで力を合わせりゃあ、化け物通りの化け物どもにだって負けないよ！」

しかしなんだか穏やかな話でない。キトは薄っぺらい耳殻をぴくぴくさせながら、次第に童顔を難しくしていく。

「あれ、あいつ、止まっちゃったよ」

「気付かれたかな」

「だいじょうぶだよ、こっち見てないもん」

「ち、違うよ！ あれっ、ほら！」

「ほんとだ！」

「やっべえ、逃げろ！」

「……あら？」

最後のは、我に返ったキトの一声である。耳に集中するあまり目

の方を閉じてしまっていたキトは、声たちがいきなりおおわらわで散っていったのでそれに気づき、ぱっちり大きな目を見開いた。すると区画いっこ分くらい向こうに、キトの行く手を阻もうとするかのように誰かが立っていたのだ。

ここへ来て初めて見た人間は、ぼろを着て、汚れて真っ黒で、男だか女だかもはっきりしない子どもだった。痩せた枝み^{すね}たいな脛を二本ふんばって、険しい両目に明らかに敵意を表している。全力で声を張らないと会話できないくらいの遠距離でここまで判別がつくのは、ハハラの目が特別いいからである。

果たして、子どもは全力で声を張り、その要求を突きつけてきた。「入るな！」

キトは、それと決めた人間以外には譲らない。「なんで？」

よって基本的に、初対面には容赦がなかった。

「入ってくるな！」

子どもは負けじと、同じことを言う。

「だからなんでよ！」キトはそんな芸のないことはしない。「言いたいことだけ言って相手の言い分を聞けないってのは頭の悪い証拠よ？ それともなあに、理由が特にないの？ 理由もなく人の行動を制限しようってのは子どものわがままね。あらごめんなさい、ほんとに子どもだったわほほほほどわあっ！」

一人芝居に入り込んでいた隙を突かれ、台詞が終わった時には子どもは眼前に迫っていた。言葉少ない者によくあるように、彼もまた要求が受け入れられない場合に腕力に頼る口だった。

「ちよっと何すんのさっ。暴力はんたーい！」

抗議も空しく、掴みかかられた勢いに押されて背中から倒される。子どもはそのまま馬乗りになり、有無なく殴りつけようとする。

「主が暴力的なのが巡りめぐってあたしのところにいっ！」

しっかり見解を述べつつ、振り上げられた胡桃の粒みたいな拳に對し、キトは無我夢中で両手を突き出す。その途端、子どもはうつ

と喉がつまったような声を発し、素早くキトの上から飛び退った。

「へ？」

腹の上が突然軽くなったので、ぎゅっと瞑っていた目をそうっと開く。黒々した廃屋に挟まれた青空があった。

「な、なによ？」

起き上がると、子どもはこちらの手が届かないくらいの場所まで下がっていた。目には敵愾の代わりに、恐慌がある。

「なんだお前」

「なんだって……ああ」

キトは尻の泥汚れを払いのけた両手を見下ろし、得心した。彼女の手は少しばかり大きい。爪の形もヒトとは違い、鳥やフーエンのそれに近い。

「ハハラ族よ。なんか文句あんの？」

「は、ははら？」

「あんたねえ、歴史の勉強くらいしなさいよ。おんなじ大陸に一緒に暮らしてる種族のこと知らないっていうの？ 失礼しちゃうわ、ふんとに」

「ば」

「ば？」

「……化け物だあっ！」

本日二度目の化け物扱いに、キトはしかし気分を害するではない。

「ちよっと待ってよ！ 入るな件はどうなったの？」ただ確認すべきことを確認するだけである。「入るわよ？ いいのね？ あっ、入っちゃった！ て、うおーい！」

子どもはものすごい速さで走り抜け、どこかの角でひよいと曲がって消えた。

「なんだってのよ……」

異種族を嫌悪するのはどの種族であってもあることだ。キトの一族だって、世界で一番のヒト嫌いで通っている。キトのようにヒトに混じって生活している者の方が変人なのである。

しかし、嫌われることこそあれ、あんなふうに怖がられたり、そのあまり逃げ出されたりなどということはない。どうもハハラ族という種族の存在を知らないような、少なくとも見たのは初めてであるような反応だった。

「おっかしな子」

気拔けのような息を吐き、番人のいなくなった境界線を遠慮なく踏み越える。再び勘を働かせてみると、さっきまで辺り中にいた覗き魔たちはひとり残らず消えていた。どころか、よくよく探してみると住人らしい気配さえなくなっている。廃墟は本当の廃墟であり、ここから先には誰も住んでいないということか。

彼女がここで当初の目的を思い出せば、いい場所が見つかったとひと喜びでもして、さっさとその辺の壁の内側にでも隠れてしまったことだろう。しかしそこはキトのことだ。

「こんなところに、なんであの子だけいたのかしら？」

それに、彼が現れたのを機のように姿を消した他の子どもらの行動も気にかかった。やばい、逃げろと言ったのを確かに聞いた。

あの子どもが日頃からこの周辺に境界線を張り、侵入者に乱暴しているからとも考えられるが……。

「よし」

キトは無駄に袖まくりなどして、鼻息を荒らげた。

「くる日もくる日もまるでまいて逃げようとしてんじゃないの？」

てくらのイルさまを追っかけて早半年。街の中も入れたら苦節二年半！ このキトさまの人間追跡能力をなめんじやないわよ！」

自分で言っただけ少し悲しくなり、慌てて頭を振ってそれを追い出す。キトの主はあれでいいのである。やりたいようにやればよい。そうさせるために、キトはひとりについてきたのだから。

風の前3年 秋 ソロワ く折れた剣く

こちら再び、賊探索中のイル。

笑顔を捏造した甲斐あり、探し人の情報はいつも簡単に手に入った。街の東から落ちる谷底の川沿いに、ナントカ同盟の首領は居を構えている。そこへ行く崖沿いの階段は断崖に金属の杭を打っただけで非常に急激であり、容赦なく体力を奪った。その上汗ばんだところに川の水気を含んだ風がふきつけて容赦なく体温を奪った。

こちらと接触を図っているという怪しげな情報が本当だったか、木造の掘建てに侵入するのはなんら妨害されなかった。今、目の下には地下への階段がある。イルは迷いなく、それに足を乗せた。ここへ来るまでに、少し動きすぎた。迷ったり止まったりしている暇はない。

きちんと板が張られ、手すりまでついた階段をきしませつつ下りると、木の風合いの上とは一変、岩盤をくり抜いた洞窟道のようなところへ出た。ちょっと顔をしかめる。

イルは洞窟運にあまり恵まれていない。子どものころからである。と。

「え……？」

一瞬、イルは直前とは違う理由で眉をひそめた。耳を澄ます。今度ははっきりと聞こえてきたその声に、覚えず目を見開き、

「ぼくが先だってばーっ！」

唐突に響いた高い声と重なる笑い声に、はっと現実を取り戻した。ぽつりぽつり、間を空けて灯された小さな灯りはあまり遠くを映し出さない。暗がりなのか道が折れているのかも分からない場所から、ぱたぱたと足音高く四五人の子どもが駆けてきた。いずれも似た年頃で、七つや八つほどだろう。彼らからもまたこちらが見えていなかったようで、直前でイルの姿を認めてわっと声をあげ、

「あっ、ロクーズ！」

「外へ行ってたの？」

大変気安く話しかけてきた。

「違う」が、すぐに人違いに気付いたらしい。「誰？」

「でもそっくりだよ」

「お友だちじゃない？」

警戒心少なに腰のあたりにまといつく子どもたちを見て、イルはかすかに眉を寄せた。嫌な予感が、急激に増す。

「……一緒に行ってもいいかな」

「ロクーズのところ？」

「うん」

「いいよ！」元気のいいのがひとり、手を挙げて請け負った。「こっち！」

小さな案内に付き従い、薄暗い道をゆっくり進む。

彼らはひと目見て、ロクーズと言った。それはこの町の不景気な名前の同盟を統べる、男の名である。イルはイルとして二十年あまりを生きる間に思い知っている。人が最初に認識するのは、自分に限っては顔ではなく体つきだ。それで人違いしたということは、賊の首領は自分と同じ……。

いくらかの横穴と扉を素通りして、子どものひとりがひとつの木戸を引っ張った。すると薄暗かった今までを全部冗談にして笑い飛ばすような、ぴかぴかの光が溢れ出した。イルは目を守るための生理的な反応として、両目を細めた。

「来たのかい」

突然の侵入に驚く様子もない、穏やかな男声。それを聞くと、子どもたちが先ほどイルを取り違えた時と同じに歓声を上げて、部屋に飛び込む。

室内が明るいのは、照明のためばかりではなかった。岩盤のままの壁に、天井に、床に、光を受けてきらきらするものがちりばめられているのだ。姿見、ガラス、金属の類はもちろん、棚や照明器具自身にまで宝飾が用いられている。調度自体が町の生活水準からし

て相当立派であるのに、それをさらにごてごてに飾り立てているのである。決して広くない窟中で、乱反射は目に痛いほどだ。

「ロクーズ！」

「ねえ聞いて。化け物通りに、またね」

子どもらがしきりに何かを報告するのに応じて、一間分の距離を隔てて小さなテーブルについていたひとりの男が、ゆらりと立ち上がる。腰を折って幼い客人をもてなそうとしたのは一瞬で、男はすぐにイルに目を向けた。イルはそれを、正面から受け止める。

堂々と相對するふりをして、内心の糸は限界まで張りつめた。町の生活水準からしたらかなり上等な、革製の衣服に身を包んだその男が、自分と同じ特徴を残らず持っていたからだ。ただひとつ大きく異なる髪と瞳の色も、いやな思い出を引きずり出す助けにしかない。

「悪いね、みんな」男は子どもたちに笑みかけた。「大事なお客さんを連れてきてくれたようだ。化け物通りの話は、また今度にしてくれるかな」

「えー」

「みんなが呪われちゃったらどうするのさ！」

「だいじょうぶ。それはない。もしそうなくても、俺がなんとかしてあげようね。さあ、いい子だからまたおいで」

しばらくぐずった後、子どもたちは、きつとだよ、明日ね、と口々に次の約束を交わしながら廊下へ飛び出していった。出際に、興味津々イルを見上げていく者や、自分たちより優先された相手に対するやつかみをぶつけてくる者がある。やがて幼い声が遠ざかると、男はまたゆっくりとした動作で、イルを通り越して出入口口に向かった。戸を閉める。

イルは油断なく、そちらを振り返る。すると青白い頬の真中で赤い唇が歪み、声音と同じにいつも優しげな笑みを作ったかと思うと、そこから決定的な言葉が流れ出た。

『やあ。待っていたよ』

思わず唇を噛んでいた。

それはごく限られた地域でしか語られるはずのない、異言語だったのだ。

『これの持ち主の人だろうか？』

イルの反応を表面上意に介さず、男は相変わらずのゆとりのある仕草で、最奥の……やはり、ぐるりを宝石で飾ってある……テーブルの向こうに戻った。その上には、キトのポーチが乗っている。傍らに、黒っぽい草を紙の帯で束ねたもの。帯には一筆書きの『式』がびっしり書き込まれていて、黒い墨で書かれたその上を、不規則な白い光が駆け抜けては消えている。

イルの立ち位置からそこまで見えるわけはなかったが、見なくたって分かる。男の言ったとおり、それはイルの持ち物だからだ。

あれを所持しているということは、彼こそ誘拐犯たちの首領。子どもたちも呼んだとおり、ロクーズに相違ない。

『案外時間がかかったね。ここ、分かりづらかった？』

ロクーズは寛いだ様子で、気さくに話しかけた。

『ずいぶん貴重な薬が転がりこんできたからさ。無くした人がさぞ困ってるだろうと思って、大事に取っておいたよ。あんたが使うの？ それとも、連れの誰かが飲むのかな』

薬草束を指先で弄び、探るようにこちらを見る。なんの感情もない顔でイルが黙りこくっていると、

『だんまり？』

純粹に悲しそうな顔をする。

「……さっきの子たちは？」

やっと開いたイルの口からは、まったく関係ない話題が、この町本来の言葉で語られた。

「町の子だよ」男は苦笑し、言語を合わせた。「ちょっとね。俺に頼みがあると、よくここへ来るんだ」

「頼み？」

盗賊の首領に？

「ねえ、頼むよ」しかし、その話題は長くは保たなかった。「こっちの言葉じゃ、あんまり難しいことは分らないんだ。せいぜい子どもたちを宥めすかすくらいさ」

「難しい話なんかしない。こっちの要求は簡単だから」

「分かってるよ、返せて言うんだろう？」

ロクーズは尖った肩をすくめ、じゃあさ、と自分が子どものように瞳を輝かせる。

「教えてくれたら、返してあげるよ。本当さ。別に俺が欲しいのは、あんたの持ち物の方じゃないんだ」

イルは面倒くさそうに頭をかき、足許に視線を落とした。どうも調子が狂う。危険極まりない特徴がてんこもりでありながら、この男の勝手に親しげな態度はどういうことなのか。

「じゃあ、何が欲しいの」

魂胆を探るつもりで、言葉尻を拾ってみる。

「それこそ簡単だな。金」

「だったらもっと堅実に稼げるやつを狙ってよ……」

「そりゃそうだね。俺も常々言って聞かせてるよ」気の合うのを喜ぶような笑顔が返る。「ただね、金ってのは、ううん、なんて言う？　そうそう、シュダンであってモクテキじゃないのさ。シュダンばかり追いかけていたら、いつの間にかモクテキを忘れる場合ってあるだろう？　だからまあ、彼らはあれでよかったんだよ」

ロクーズはひとりひとりと近寄ってきて、イルの鼻先に顔を寄せた。

「知りたい？　俺たちのモクテキを」

知りたくない、ことはない。この際だからはっきりさせたい。

マースクの時は彼自体が信用ならなかったから、聞いて面倒なことになりたくないと思った。が、ロクーズはある意味信用がある。はっきり敵だと分かっているというのは、イルにとって信用の一種なのだ。

「でもこれは難しい話だからなあ」

こちらが揺れているのを見て取って、ロクーズはもったいを付けた。イルは気が長くない。

『……分かったよ』諷言ふうげんに乗り、仮面を取っ払った。『聞くから言ってみろ』

『ははは！ ほらね。そっちの言葉の方がずっと似合ってるよ、あんた』

異国の言葉は異様に男を喜ばせた。イルは反比例して顔を陰しくし、黙ったままで先を待つ。

『俺は薬には詳しくないから、暇しのぎに調べてみたのさ。そして、こいつの効能にぴんときちゃってね。持ち主さんが俺そっくりの剣使いだって言うから決定打。あんたが手段じゃなく目的の方に繋がった』

ロクーズの目が、愛しい者を見るように細められる。

『センの男で、剣を使う輪郭のない呪術師……俺たちはそいつを探している』

イルの右手に、緊張が走る。

『探せって言う割に情報が少なくてね。まあ、だいたい当たってたんだけど、確信が欲しかった。あんたがこっちの言葉を理解するなら、それは大きな証拠になる』

確かに、この言葉を操れる人間は限られる。読み書きならまだしも、会話ができるとなるとよほど絞られてしまう。

イルは、心臓がひやりとするのを感じた。

ロクーズに人探しをさせているのは、イルがこの言葉を話すという事実を知る者。イルがああ薬を必要としていると予想できる者。さらに、

『死んだなんて嘘だったんだな。ハーター・イルオール』

イルと、現世の救世主ハーターとを結びつけている者。

その心当たりが、イルにはひとりしかいなかった。

『……イェンゼンの術師か』

『んー！ 近いけど、ちよっと違う』

大げさに両手を広げ、ロクーズは宣う。

『ここをどこだと思ってる？ ザフィアの東の門、ソロワだよ。イエンゼンだのエンドだの、そういうしがらみはここにはないのさ。俺は見てのとおりセン族だし、呪術師ではある。でもイエンゼンに属する者じゃあない。今はたまたま、依頼主がイエンゼンかも知れないけどね』

『いいの。そんなことまで話して』

『いいよ。どうせそっちも、その気だろう？』

その気、というのがなんのことだか、考えるだに吐き気がした。この男は楽しんでいるのだ。今を、これから起こるだろうことを、そしてここへ至るまでの経緯をすべて。

『俺たちは、この仕事がどういう意味を持っているかを知っている。どれだけ危険かってこともね。だから、俎上に乗せるのは互いの命さ。勝った方が全部手に入れる。相手の命も、情報も、全部。ここへきて、隠し事はなしさ』

『だからって、全員殺したの』

『へえ？ なんで知ってるの？』

うまく運んだいたずらを思い出すように、ロクーズは肩を揺らした。テーブルに腰かけ、長い足を組む。

『だってさ。彼らは知ってしまったんだから。あんたはひとりだから、あんたが負けたらそれっきりだ。もしか俺が負けた時、彼らだけ生きて逃れてたら不公平だろう？ ゲームは公平に。それが俺のルールだ』

楽しそうに持論を述べられると、我慢ができなくなる。

この岩回廊には、声が充満している。なんの前触れもなく、問答無用に命を奪われた者たちの声が。驚愕と憤怒と哀絶、もしくは己の運命に気がつかずにいるがゆえの恐ろしいほど平和な世間話。それらは、イルの身体をひどく蝕む。

『……何がゲームだ！』

だからイルは、気長には構えられない。

『人巻き込んで勝手に死人出しやがって。嫌がらせか!』

『なんだい、善人ぶるなあ』

『善人? 善人なもんか、最低だよ俺は。俺がいやだから言ってるんだ。こんな声はもうまっぴらだ!』

『どういうこと?』

『いっぺんだけ言う』疑問を受け流し、イルは主張を突きつける。

『何も言わずにそれを返せ。それで今回の仕事は忘れろ』

『むちゃくちゃ言わないでよ』

わざと勢いをつけてテーブルから飛び降りると、ロクーズは優しさとは違う種類の笑みを浮かべ、

『こんな面白いもの、忘れられないよ。途中でやめるなんてもっての他さ』

左肩と左足を、半歩だけ下げた。

外套の中で、イルもまた剣に手をかける。男の構えは、呪術師の……徒手フリーの使い手に特有の戦闘態勢に他ならない。

『イエンゼンがあんたを手に入れたら、世界がひっくり返る。今は平和じゃなくて空白の時代さ。気付いてるやつはほんのひと握り。そのひと握りと仕事ができる。こんなやり甲斐あることないよ。ついでに、単純に、ひとりの呪術師として』

腰を落とし、引いた左手に拳を作る。

『ハーターと手合わせできるってのも、捨て難い!』

固めた拳が、球を投げるような動作でこちらへ突き出されるのを、イルは見届けた。何も道具を必要とせずただ動作だけで呪術を操る、フリーのダイナミック。呪術大国イエンゼンに属さないとと言っても、やはりセンの血が生むものは高位の呪術師なのだ。

しかし、手の先から起こった呪縛の術は、イルになんら害を成さない。

ロクーズが息を呑むのと、イルが重たい息を吐くのが重なる。剣の柄にかけた左手の先で、イルは器用に金属の釦を弾く。革紐の封印を解いたところで右手で刃を滑らせる。剣は何にも届かず、従

って何も切らず、ただ抜き放たれた軌跡から突風を生じた。強すぎる風は空気の断層を生み、その場にいる者の視界を大きく歪める。賑々しく輝く小さな部屋の中が、夢の世界のようにぼやけ、うねる。きらきら、きらきら、目にうるさい光が波打ち、波紋を広げ、やがて風の収束に合わせてひたりと落ち着く。

何事もなかったみたいに、世界は元どおりになる。

ただ一点、ロクーズの姿だけを欠いて。

「……そんなたいしたもんじゃないけどね」

消えた男の最後の言葉に答え、腕を下ろす。右腕の先、骨張った指が握り締めているのは、赤い柄と棒鐐のついた……まん中で途切れた細い剣。

イルはしばし、久しぶりに見たその平らかな断面を、複雑な面持ちで見つめた。その目が失われた切先を映すと、一瞬悲しみめいたものが浮かび、あるかなきかの内に消え入る。

しばらくして、イルは力ずくで剥がすようにして顔を上げた。途端にひとりを自覚して、

「あっ」

後ろを振り返り、跳ね返って前を見る。

「やば」

剣を鞘に放り込み、テーブルの上のものを片手でざっと取り上げて外へ飛び出した。

「帰り道分かんないって!」

とつくに影も形もあるはずのない子どもらの気配を暗闇に探る。中が明るすぎるので、廊下はまるで真っ暗だ。一大事だ。本気で帰れない。しかし焦って踏み出した足は、一步で押しとどめられてしまった。体から力が抜ける。いっさい言うことを聞かなくなる。

やはりいくつになっても、洞窟とは相性がよくない。

「最低」廊下のまん中で倒れる自分を自覚しながら、イルは最後の悪態をつく。「ここで……?」

乾いた軽い音をたてて、イルは落ちた。ちょうどその時、いずれ

も闇に溶けてどこまで続いているのかも分からない洞窟道のひと筋に、ふらりと人影が現れる。

風の前3年 秋 ソロワ く拒絶の風く

さて、主の身の危険など知る由もない、化け物通りのキトは。

「待ちなさいってのにっ！」

目下、全力で子どもを追跡中である。

「来るなああっ！」

子どもは子どもで、全力で逃走中である。彼が恐慌を来すのも無理はない。どこに隠れようと、敵はまるですべての壁を透視しているかのごとくあっさりと、こちらを発見してくるのだ。既に身を隠すべき場所はないと悟り、脚力の勝負に出て数分が経過した。見るからに痩せて栄養の不足した子どものこと、とくに体力は限界だったが、鬼の形相で追いかけてくる角を生やした生物があれば実力以上のものを発揮するのが本能というものだ。

化け物通りと呼び習わされているこの廃墟地区は、存外狭い。こちの角を曲がり、そちの路地に飛び込み、子どもの逃げるに合わせて構わず駆け回っている内に、キトは自分たちが同じようなところをぐるぐる回っていることに気付いた。彼は他人に入るなど言った代わりに、自分もこの近辺から出ないようにしているらしい。

「ちよっと話聞かせてよって言ってるだけじゃないのよー！」

「来るな化け物っ、わ、わあっ」

走りながら振り返った途端、子どもは自分の足につまずいてこけた。

「捕まえたっ」

すかさず飛びかかり、のしかかって押さえつける。さっきとは逆の体勢だ。

獲物はすっかり怯えきり、さっきキトがしたように両手を突き出して、懸命に顔をかばう。

「別に殴ったりしないわよ。あんたじゃあるまいし」乗ったまま、キトは腕を結んで言う。「逃げるから追っかけるの。世間じゃ

男性の特性みたいに言われてるけどね、別に女だって男だって逃げるものは追っかけるようにできてんのよ？　もう逃げないで話するってんなら退くわ。てちよっと聞いてんの？」

「おっ、お前も」

「は？」

「お前もゼクレの仕業なのか！」

「なんですってえ？」

意味不明の問いに思わず声をひっくり返すと、その隙について子どもが想定外の背筋力を発揮した。ばねのように体を弾いてキトをはね除け、腹這いだったのを返して尻をつき、ずるずると後ずさる。「ゼクレに呼ばれたんだったら、間違いだ。間違いだから、謝るからっ、だからもう帰ってくれ！」

「……ちよっと」

はね飛ばされて尻餅をついたキトは、ぱっと立ち上がり子どもを睨む。

「レディーを押し倒したりはね除けたり、失礼極まりないわねほんとに。それとなんの話してんのか全然分かんないから、きちんと順序だてて適宜注釈を交えて誰にでも分かりやすいように説明してくれる？　まず、ゼクレって何？　人名？」

「ぜ、ゼクレは……弟だよ」

キトの滔々たる弁に気圧されはじめたのか、子どもは少しばかり落ち着きを取り戻した。

「なあに。あんたの弟はあたしみたいのをよく呼ぶっての？」

「違うよ！」否定は激しかった。「勝手なことやってんじゃねえよ！　あいつはなんにもしてねえっ！」

「まあ呆れた勝手なのはどっちよこの自己主張過多のド近眼」

「……」

「なんにもしてない弟が、なんであたしを呼んだなんて思うわけ？」
「う……だ、だって」

子どもは痛いところを突かれたみたい、むすっと押し黙る。徐

々にだが、キトにはなんとなく読めてきた。

自分を頭から化け物、つまり相容れないものだと言いつけている少年。それをどうにかここから遠ざけようとする行動の理由は、恐らく、廃墟への立ち入りを禁じている者とそれとの関わりを忌避している者の対立構造に関係がある。化け物通りと呼ばれる通りに住む彼らにとって、本当の化け物がここに現れるのは都合が悪いのだ。本物がいることによって、「言いがかり」が「本当」になってしまいうから。

「兄ちゃん？」

その時、左手の瓦礫の影から小さな声がした。見れば灰色の壁の成れの果てから、顔を半分だけ出してこちらを見ている子どもの姿がある。今キトの前にいる子どもより、もっと小さくて痩せっぽちだ。

「兄ちゃん！」

「ゼクレっ」案の定、弟のようである。「ばか、出てくんない」が、ゼクレは兄の言うことなどまるで聞かない。彼はちやうど、仁王立ちのキトとそれに見下されて地面に尻を着いた兄の恰好を見てしまったのだ。兄の身を危ぶんだのに違いなかった。小さな少年がキトと兄の間に割り込み、両手を広げて立ちはだかる。きつとこちらを睨んだ瞬間、汚れた顔の中の円な瞳が大きく見開かれた。あ、と口が開く。

やっぱり化け物扱いか、とキトがうんざりすると同時に、兄は後ろから弟を抱きすくめて両目を塞ぐ。だいじょうぶだ、だいじょうぶだから、壊れたみたいになさう繰り返す。キトはわけが分からなくて、困り顔でふたりを見下ろしていた。どうも、弟の様子がおかしいのだ。

「あ、あ……」

兄にすがりついて、弟は小刻みに震えている。最初に兄の方が見せた以上の恐慌を来しているのが見て取れた。いい加減にしてほしいわ、とキトがそっぽを向いて嘆息した時。

絶叫が廃墟街の空っぽに共鳴した。その声に驚いて逃げ出そうとしたみたいな突風に押され、キトは今度こそ本格的にはね飛ばされた。

「おう、どした」

意識を取り戻した刹那、まるでこちらから声をかけた時の返事みたいなことを言われた。イルは数秒ぼうっとして暗い岩の天蓋を眺め、自分が横になっているのを知って慌てて起き上がる。

「そう睨むなよ」隣に巨漢が座していた。「何も手出しはしてねえぜ？」

「……何してんの、あんた」

はち切れそうな革のジャケットに覚えはないが、馴れ馴れしい語調と若干の酒色は紛うかたなき昼間の軟派男だった。言葉どおり何もされたり取られたりはしていないし、倒れたと記憶している場所から動いてもいない。ほんとうにただ眠りこけた自分の隣にいただけのようである。

「そろそろここを探しあてたところかと思ってよ。来てみたらなんとあんたがぶっ倒れてるわけよ。まるで寝てるのと変わらねえからそう大事でもねえだろうと思って、放ってみたが。いってえどんな理由で、こんなところで寝てたわけなんだい」

「別に」

言葉の途中から地面に落ちた剣とポーチとを拾い上げにかかり、イルは即答でその場を去った。道は依然として不明だったものの、この男と離れるのが先決だ。

今度は酔っているようには見えないのに、マスクはやはり追ってくる。

「盗られたもんは取り返したようだな」

「なんでついて来るの。しかもこんなとこまで。はっきり言って、鬱陶しいんだけど」

「あのなあ、男つてのは本能的に逃げるもんを追っかけるようにできてんだぜ。うまく立ち回りたけりゃあ、敵の習性は知っとかねえとよ」

あんまり軟派なので一発蹴り上げてやろうかと思ったら、相当殺気だった目を向けてしまったらしく、ちよつと距離を空けられた。

「いや、冗談冗談。言つたら？ あんたに惚れたって」

「ふざけるな」

「違うんだって。惚れたってのはよ。あんたが俺の借金を返すカミサマだって分かったからよ」

「は？」

奇想天外より来る発言に、イルは立ち止まった。くどいようだが、金はない。

「俺あ、わけあってちよいと借錢があるんだが」

「飲み代でしょ」

「まあそうだがよ」なぜ隠したのか。「それを返す方法ってのがちよいと訳ありだよ」

「ああそう」

「分かっている！ 分かっているぜあんたが興味ないのくらい。だがよ、雨の恵み同盟の主義主張を諦める代わりにこれだけは聞いてくれ。でねえと俺は一生借りの作りっぱなしだ。それに、あんたも困ったことになると思うぜ」

マスクは懲りずに横に並んできて、哀れっぽいのと皮肉っぽいのを混ぜ合わせた顔をして反応を待つ。死んでも反応してやるものかと思わせる表情である。

「金の代わりにひとつ、頼まれごとをしてな」

意に従って死んでも反応せずにいたところ、マスクは少々不服そうに事情を語り出した。

「この町に必ず現れるってえ男を俺は待ってたんだ。外つ国の西の血筋、歳は今年で二十四のはずだが、ひよつとしたら見てくれは大分若いだろうと言ってたな。女ものの拵こしらえに納めたアルトレットを持

ってる、そういう人間がやって来たら、俺はきつとそいつを捕まえて借錢の代わりに連れて行くと約束した」

イルは死ぬ前に反応を示すはめになった。

地面から拾ったきり鷲掴みにしている剣の名は、アルトレット。サクラカスミと呼ばれる希少な桃色の金属に繊細な透かし彫りを施した鞘は確かに、装飾性に隠して軽量化した女性向けの仕様。身の丈に合わない短い刃渡りを見ても明らかなのに、それは元々イルの持ち物ではない。

非常に嫌な予感がする、と雄弁に語る顔を向けると、マスクは腹の立つしたり顔を返し、上げた口角から腹の立つ脂下げ声を出した。

「リサってえ女に、あんた覚えはないかい？」

最終的に一番腹が立ったのは、マスクの期待を外してやることのできない自分だった。

風の前3年 秋 ソロワ 大切なもの

「……ふあ？」

化け物通りの一画、辛うじて家屋の体裁を保っている小さな建物の中。よく知った声が、正体なく眠りこけたキトを揺り起こした。目を開けてみると、そこには果たしてイルがいた。

「はら。お帰りなさいませ」

寝ぼけているのではなく、後頭部に鈍い痛みを感じてキトが締めりのない声を出すと、イルは面倒くさそうにうんと返事して、しゃがみこんでいた膝を立てた。

「荷物」

「あ、はい」

ぽいと投げて寄越されたポーチは、手で受けるまでもなく、すぽんとキトの膝の上に収まる。そこにはおんぼろの掛け布がかぶさっていた。覚えのない場所と境遇に、急いで記憶を巻き戻し、

「イルさま！」

キトは自分の受けた仕打ちを申し立てようとさかんに挙手をした。が、イルはそれを見もせず却下した。

「聞いたよ、だいたい。たった今」

「は？ 誰に」

「こいつが悪いんだよ！」

尋ねるまでもなかった。耳についた子どもの声が、耳についた調子で自己主張するのが聞こえてきたのだ。

「入るなって言ってるのにずかずか入ってきたのが悪いんだ！ 俺たちは悪くない！」

「同感だなあ」

キトが寝かされている壁際からもっとも離れた反対側の壁際に立ち、ゼクレの兄がまっすぐこちらを指差して吠えている。二者の中央にあたる場所で、やはり壁に背をつけた恰好のイルは、完全に子

どもの肩を持ってキトを見ている。

「だって」キトは毅然と反論した。「きちんと理由もつけずに入らなって言われたって、従う道理がございませぬ。その上人を化け物扱いして勝手に逃げるだなんて、もはや人道に反します」

「そりゃ仕方がないよ。この子たちにも理由が分かってないんだもの。キトを化け物扱いした件は、まあ、見たことないもの見た時の仕方ない反応ってことで」

腹に落ちない様子のキトを見て、イルは今度は子どもの方を向いた。

「ねえ、そうだろ。きみは弟に何が起きてるのか知らないし、誰もそれを教えてくれない」

「……うん」

「他に、弟と同じようになっただけの子はいなかったの」

「いたよ」子どもは、イルに対しては折り目正しい。「でも、いなくなつた。みんなここに集まって暮らしてたのに、いつの間にか」

「じゃあ今は、彼ひとり？」

「そうだよ」

イルが、彼、と言って目を向けたのは、兄の傍らにある破れかまどの影になつた場所である。

「なるほどねえ……」

頭の中でばらばらの情報を並べ替え、それなりの形を作り上げると、イルは壁から背を離した。若干の警戒を見せる子どもの前を通り抜け、かまどの影を覗きこむ。

「で、きみがゼクレ？」

そこには痩せっぽちのゼクレが背を丸めてうずくまっていた。声をかけられると小さな体が大仰にびくりとする。それを見て何故か少し面映いような顔をしつつ、イルは兄の方に目配せした。躊躇いがちに兄がうなずく。

「ゼクレ」イルはキトの傍らでしたように、気安くしゃがみこんだ。「ちよつと話があるんだけど。聞いてもらえないかな」

「……ごめんなさい」

ゼクレが頭を抱えたままそう呟いた時、イルの表情は一瞬、今にも泣き出しそうになる。

「ごめんなさい。ぶたないで……」

「……ぶたないよ、別に」

気をとりなおしてそう言った時には、その顔はほんの少し優しげになっていた。キトがそれを、食い入るように見つめる。

「ぼくはイル」

「……イル？」

「そう。ねえ、話してもらえないかな。きみはなぜこんなところに住んでるの。ずっと兄さんとふたりきりなの？」

そっと地べたに座り込み、膝の上に折り重ねた腕に顎を乗せ、尋ねている相手を見ているようで見ていないような目をするその姿は、縮こまった少年の目に不思議に映った。そこには普段彼に向けられるような負の感情もなければ、兄が向けてくるような困惑もなければ、少年が夢に見るような温かみや思いやりもない。

そこはまるで、空けてあるのである。これから来る者に合わせて、何色にでも染まるように。

「最初からずっと、ここで」

「うん」

「兄ちゃんと、エミとジェイと」

「いなくなつたみんなだな」

「ぼくらが、町を、みんなを、壊すから……っ」

それを言うのと、ゼクレはまた小さく震え出した。いくら目を瞬いても、もう涙は出尽くしてしまったみたいだった。

「壊すって、どんな時に」

「……分かんない」

「知らない人が入ってきた時とか？」

「うん」

「誰かにぶたれそうになった時とか」

「うん……」

そのやりとりを聞いていたゼクレの兄は、何の話かは理解しないまま、ただ弟に何か起きやしないかと見張っている。一方キトは、イルが何を言わんとしているかをそろそろ察しはじめていた。さきほど発した突風めいた衝撃波。混乱した子どもの我もない喚き声。廃墟の外の人間たちの対応。まるで呪いっ子の『癩癩』そのままではないか！

「なあゼクレ。壊さない方法、教えようか」

「え？」

ゼクレが初めて、まともにイルを振り仰ぐ。イルは相変わらず、にこりともしなければ嫌そうにもしない。

「できるの……？」

「簡単だよ。まず、どんな時に自分がものを壊すのか、ちゃんと思いついて整理してみな。そしたら今度は、いつもならものを壊してるなって時に、ちょっと思い出せばいいんだ。大切なもののことを」「大切なもの？」

「例えば、兄さんのこととかね」

ちらりと目をやったゼクレの兄には、生傷古傷が多くある。だがそれは、心ない誰かから弟をかばってのもののだろう。ゼクレのような者の一番近くにいて逃げ出さずにいることが何よりの証拠だ。ゼクレは、兄だけは一度も傷つけたことがない。

「ほんとに……？」

「まあ、やってみて」

保証はしかねると言うように肩を竦め、イルはぱっと立ち上がる。「邪魔したね。たぶんもう来ないから安心して。じゃあ」そしてキトの方を見もせず、扉のない出口へ歩き出した。

「あ」キトは布を蹴り飛ばし、ポーチを引っ掴んで後を追う。「またそうやってわたくしを置き去りに！」

自分も子どもに見向きもせず、外へ飛び出すと、雄弁な彼女の口が閉じた。外にはイルと一緒に一匹の熊がいたからだ。

「お見事」熊は言った。「あのガキどもが人の話を聞くとこなんぞ、初めて見たぜ」

「ああそう」

「イルさま」キトが熊から距離を取り、「こちらの方は」

熊の身元を尋ねようとした時。

「イルっ」

出たばかりの廃屋から、ゼクレが顔を覗かせた。飛び出さんばかりの彼を、心配そうな兄が取り押さえている。

「ぼく、ね、やってみるよ。やってみるから、あの」少年は言い慣れない言葉を言うために、大きく息を吸った。「また、来て……」

「ご指名だなあ」

身元不明の熊がにやりとし、あまつさえイルの背中をばんと叩く。気安すぎる態度にキトは目を丸めたが、イルはそれに対しては何も返さず、少し不快そうな顔をしてゼクレを見るのみだった。

「悪いけど。たぶんもう来ないよ」

連れない返答に、少年の顔が萎む。

「友だちが欲しかったら、この町で探すんだね」幼い子どもの哀愁の表情にも、イルはきっぱり背を向けた。「生まれた町だろう」

その後彼らがどんな顔をしていたか、イルは見えていない。キトは主に従ったものの、二三振り返ったので少しだけ知っている。

ふたりは、けっこう長いこと、イルを見送っていたのだ。呼び止めることはもうなかったけれども。

「それで、こちらのお方は？」

「マースクだ！」熊はみずから名乗った。「よろしく頼むぜ、ハハラのお嬢ちゃん」

「は？ 何を頼むんです？」

「ああ？ だってあんた方、俺を探してこの町に寄ったんだろ？」
キトは廃墟と貧民街の境目で、ぼつねんと立ち止まる。

「……イルさま？」

「そういうことだそうですよ」

イルの返事は過去最高になげやりだった。

「ではこの方が！？」

「おうよ！ こっからの案内は引き受けた。まあ任しとけて、ザフィアの北半分で俺の耳に入らねえ情報はねえんだからよ」

がははと熊らしい大男の哄笑を受け、一刻も早く南半分に到達せねばならないとキトの本能が告げた。むりやり腕を取られているイルは、肩まで組まれそうなのを密かに拒否しつつ、

「リサのやつ……」

諸悪の根源を小さく罵った。

こうして当初の予定とはまったく別の行動を余儀なくされている内にいつの間にやら当初の探し物を掘り当てたふたりは、三人になってソロワを後にする。情報通をもってみずから任ずる熊のマークによれば、次の目的地の名はイブ・クレストというそうだ。

風の前6年 冬 サナ く昼前く

帝都サナはその皇宮の敷地内に、大きな三つの孤児院を擁していた。それは、長らく終わりの見えなかった戦争によって親を亡くした戦災孤児たちのために、皇帝が創設した施設であった。故あって一度全壊した後、数年かけて元のとおりに建て直されて、今や元孤児たちから見ても素直に懐かしいと言える風合いを醸している。

終戦五年、そこには今だに多くの子どもたちが暮らしている。

「とは言ってもよ」

長過ぎる前髪を吹き上げながら、ロンは仲間たちを見回して口を開いた。かつて彼らの縄張りであった広場の大木の根元では、孤児院の幼い子どもたちが相撲を取っている。元孤児たちは少々寂しいような誇らしいような気持ちを転がしつつ、皇宮前の白亜の大階段に集合していた。

「あいつ、もう三月みつきだぜ。だいじょうぶだと思うか、これ」

「だいじょうぶなわけないだろ」

まっ先に答えたのは酒蔵のシリン。

「俺たち、ひとりもちゃんと話してないんだ」石切のクルルが悔しげに加える。「寮勤め組の三人つきりだろ。直接会ったの」

「会いには行っただけだね」

会ってほもらえなかったと言外に訴える、染め物屋のドロシー。

裁縫職のココとノノは悲しそうに顔を見合わせる。

「あたしたちのこと嫌いになったの？」

「もう会ってくれないつもりなの？」

「そんなことない」

両手で顔を覆って呻いたのは、寮勤め組のひとり、剣術寮のミチ。「そんなことあるわけない。そうだろ？　だって……だって」彼はまるで、すべての責任を負うみたいな顔を上げた。「イルだよ？」

一同、その見解に異論はない。あるわけがなかった。

「そうだけど」

イルは、現に、おかしいのだ。

「そっちはどうなんだ、アーテス」

ロンが目もやらずに尋ねたのは、一番上の段にどっかと腰掛けたアーテス。マーテス公爵家六女にしてミチと同じ皇宮の剣士だ。

「相変わらず、だと」

その報告の仕方は、彼女自身、直接には見知っていない情報であることを示唆した。アーテスでさえ、最近は会うことも叶わないのだ。

「……なんとかしようぜ」

重々しい声で、クルルが言い出す。仲間たちは黙ったままだが、皆心の中では同じことを思っていた。今日こそ自分が言い出そうと思ひ、今日こそ誰かが言い出してくれないだろうかと思ひついていたのである。

「でも、どうやって？」

それが大問題だからだ。

八人は近しい者同士顔を見合わせ、しばらく考え込む。今ここで提出できるような妙案があれば苦労はしない。

ただ、絶対に今のままでは終わらないという意志だけは全員の胸にあった。彼らはそれぞれに負っているのである。胸の底に刻み込まれた消えない傷痕を。それは傷痕なのだけれども、一緒にあったきらきらしたものを思い出させてくれる大切な傷痕なのだ。

仲間たちは、この問題の答えを出すのに、この後何日もを割いた。彼らは皆、もう一度あのきらきらしたものを見たい、その一心だった。

アーテスの言う相変わらずとは、およそ以下のようなものである。

イルはバンスの鍛冶屋に戻っているが、仕事は一度もしていない。毎日ひとりで、街の学校へ向かう。広い帝都でもふたつしかない高

等教育を行う学校のひとつで、イルは一日中、図書室を借りていた。生徒たちが出入りする三階部分ではなく、普段は貸し出しされないような資料を置いた四階の蔵書庫で、南側の窓際をすっかり定位置にして、日がな一日、本を読んでいた。

「熱心なことだ」

そこには、老いて宮殿勤めを辞した司書のサツテフェルがいた。彼はフーエンという一族の男で、すっかり成長したイルでも顔を上げないと目を合わせられない長身である。宮殿にいたころとは違った気軽な服装の裾からは、種族の特徴である二本の尻尾が伸び出して揺れている。

「いや、熱心とはちと違うような」

蔵書庫の読み物机で自分の読書をしていたサツテフェルは、その日もやってきたイルを見て、色の薄い目をすうと細めた。

「きみはここに、何を求めるのか」

「……何も」

イルは呼び止められたことに暗い表情を示し、短く返答した。サツテフェルは澄ました顔で……フーエンというのはたいがこういう表情をしている……そうか、と言った。

「相応の足場を築いた今、そこからどちらへ手を伸ばそうともきみの自由。だがイルオール、そう気を悪くせぬで欲しい。私はここで今だに私の真実を探すものだが、歳食って芽生えし浮気心をよしに、きみが達する真実にもまた興味があるのだ。その高さに。あるいは広さに」

「そんなもの、ぼくには見つかりませんよ」

「そうか？」二本の尾が、誘うようにゆらめく。「すべての鳥どもはヒオウの眷属。襲い来たりし砂から鳥が助けし少年の末路、知りたく思うは詮無きこと……私の残り少なき愉しみのひとつよ」

サツテフェルはフーエンには珍しく声を出して笑い、自読の書に戻った。

イルはめっきり疲れたような気がして、心もとない足取りで読み

さしの一冊を取っていつもの窓辺に至る。そこには机や椅子があるわけではない。岩屋の壁は分厚く、くり抜いて外寄りにガラスを取り付けた嵌め殺しは、イルが腰かけても問題ないくらいに深い出窓様になっているのだ。

「カーテンはお閉めになりませんように」

そのつもりで両足を乗せてしまったところで、不意に注意を受けた。イルはガラス越しに冬の晴天を仰いだ。

「呪法教典第二十六章。ふむふむ、先日の続きでございますね」

出窓の正面の本棚の最下段、本があるべきところに、最小にまで体を折り畳んだ少女の姿が嵌りこんでいる。その恰好でぎろりとこちらを見上げているのだから、なんだか自分の殻に閉じこもった挙げ句人を呪い殺そうとでもしているようである。

「以前から思っていたのですが」

イルは答えずに本を開いたのだが、少女は構わない。

「なぜイルさまは、今さらそのようなものをお読みに？」

「……いいから出てきたら」

そう言ったのは、あまりに窮屈そうだったからではない。単に答えたくなかったからだ。

では、とまるで許可を待っていたみたいなお返事ひとつ、本棚から這い出してきたのは、ハハラの少女キト。少女と言っても見た目だけで、優に五十年は生きているらしいが、彼らは歳を数えないので正確なところは分からない。イルが目覚ました折り、ロンに一撃喰らわせた彼女である。

それが、どうしたわけか側を離れない。

「イルさまはハーターで」キトはしわになった裾をせっせと伸ばしつつ、言葉を連ねた。「八千年戦争を終わらせた呪術師でいらっしやるのですよね？ 呪法教典は呪術の教科書でございます。そりゃあ、五章以降は要資格指定ですけども。今さら、復習の必要もないのでは？」

「ぼくも前から思ってたんだけど」イルは断固として答えない。「

なんで、さまなの？」

「アーテスさまのご朋友でいらっしゃるからですが」

「落ち着かないからやめてくれないかな」

「そうは参りませんよ。けじめでございます」

「ああそう……」

早々に諦めて、文字に埋もれた。イルは、キトが苦手だった。

彼女は、ハハラの本道である本草学の他にもさまざまな分野に足をつっこむ勉強の虫であるらしい。他方で学問の師とは別に、人生の師と仰ぐ人物を持っている。今現在、彼女の人生の師に収まっているのがなんとアーテスなのである。それもまるで当てこすりのように、五年前から。

先の秋までの五年間、イルは、空白の内に眠っていた。

キトはイルの知らないアーテスのことばかり知っている。イルが知ることのできなかった皆のことだけを知っている。その上、今まで意識のないイルのことしか見ていなかったわけだから、世間の語るとおりにイルを捉えている。彼がハーターと呼ばれるようになったしまった経緯がいかに偶然の連続だったかも、呪術師として戦争に参加しながら教典の一章と五章しか修了していないことも、何も知らない。

イルにとって、キトは五年のずれの象徴なのだった。

「読書中申し訳ないのですけれども」

今もつとも見たくない現実を象徴する者は、そんなこととはつゆ知らず、まっすぐにイルを見上げている。

「本日はアーテスさまよりひとつ言付けを承っております」

いつもただくつついてくるだけで目的の見えない彼女だが、今日是一件用事があるらしい。イルは仕方なく、横文字を逆に辿って床へ視線を落とした。人の用事を聞く時は、きちんと目を合わせないとならない。

「お知らせする前に確認するよう言いつかっておりますが、肩の傷はもうすっかりよろしいのですか？」

「ああ。うん」

飲まず喰わずで眠り続けて生きながらえたことと同様、眠りに落ちる前に負ったあの傷が目覚める時までそのままであったのは、大きな謎だった。さらに言えば、イルの外見は五年分の歳を取っておらず、十六七の少年のままである。体の時間が、すっかり止まっていたかのようだ。

「それでは」キトはぴっと背を伸ばし、任務を遂行した。「本日夕刻、いつもの場所で。以上です」

「え？」

イルは驚いて思わず声を上げたが、何も知らない少女はとんでもない内容を言い切って平然としている。

「……どういうこと？」

「そう言えば分かったとおっしゃいませندしたが」キトは首を傾げる。「いつもの場所って、どの場所です？」

「いや、そこじゃなくて」

言い返そうとして、彼女が単なる伝令係でしかないことに気付き、言葉を呑む。伝令に抗議文を押し付けようかとも思ったが、それも無駄だと思い直した。キトはアーテスの手先に等しい。アーテスを差し置いてイルに味方したりはしない。

呪術の物質に及ぼす影響についてつらつらと記されたページの上に、イルは額を押し付けた。

「なんです？」

キトの声は不満げである。

「以前から思っていたのですが、イルさまは思っていることを半分もおっしゃいませんね。そんなことでは鬱屈は蓄積される一方でございますよ？」

近すぎてぼうっとなった文字を睨む。知ったようなことを言うな。冷たい心の底に、そんな言葉が寄せては返す。

何も知らないくせに。勝手につきまとっているだけのくせに、ぼくを分かったようなことを言うな……！

「……別に」結局、出たのは重い吐息だけ。「何も思っていないよ」
言い捨てると、イルは勢いよく出窓のカーテンを引いた。四階の高さに生じた閉ざされた空間は、彼にとって一番居心地のいい場所となる。

風の前3年 冬 春の村 〔桜図書館〕

非国家組織ザファイア。

八千年を待たずしてヒトの争いに見切りをつけた人々の作る集合を、世界はそう呼ぶ。彼らは彼らを一元管理する組織、すなわち国を持たないからだ。町や村を単位に統治らしいものがあればあるし、ない場所にはまったくない。覇権争いを逃れた人々は、覇権の存在を容認しなかったと見える。

東の国エンドから南下してザファイアへ入ったイルとキトは、マースクを加えてソロワを発ってからいくつかの集落を経由して、春の村と呼ばれる場所に辿り着いた。祖国では一年で一番寒くなる時期を迎えているはずだが、そこは名のとおりぽかぽかとしてうららかだ。

「フーエンの里さね」マースクがそう言ったのは、村の光景を全員が視認してからだった。「フーエンはご存知かい？」

「もちろん」キトが若干むっとしながら答える。「エンドの都や宮殿には何人もいるもの」

帝国エンドの皇帝を支える五つの柱、寮と呼ばれる専門家集団のひとつ「歴学術寮」を形成しているのは、すべてがフーエンだ。彼らは長い寿命と根気強い……周囲を顧みず物事にのめり込む、とも言う……性格によって、知識を溜めることと溜めた知識を分類することとに長けている。宮殿の書架にある何万冊という資料をひとり三巡は読破しているとも言われ、こと網羅と俯瞰を要する歴史見解の深さにおいて右に出る種族はない。

それだからフーエンの姿形自体は見慣れていたが、彼ら本来の暮らし振りを見るのは初めてである。制服を着て宮殿を歩き、あるいは街中に溶け込み、ヒトと似たような住居に住まう者たちと、春の村の住人たちとは、やはり違う。

そこは、南向きの断崖絶壁である。村と言うより崖沿いの横穴、

人の大きさに合わせた蟻塚の趣だ。

「なんでこんなところに寄ったわけ？」

遠路迂回してようやく立った崖下から、空一面を覆い隠さんとする高さのそれを見上げて、キトがごねた。彼女は基礎体力が低い。

「ぼくが寄りたいて言ったから」

答えたのは、尋ねられた案内役ではなくて主人だった。

「何かあるのですか？」

キトは口調を改めてなお問う。ここは彼女にとってみると、なんの用事もない場所だからだ。

旅の途中人里に立ち寄る理由は単純だ。必要物資の調達のためである。ひとつ前の町で調達した蓄えがじゅうぶんに残っている今、この訪問は不要の寄り道にしが見えなかった。さらにキトが管理しているものに絞って言えば、ヒトがいない場所では入手不可能だ。

「ある、かも知れない」塚の中程を見つめたイルが、頼りない返事を寄越す。「ここじゃないかも知れない」

「なんです？」

「本を借りたいんだよ」

「本？」

本なら持っているではないか、というのは言わなくても伝わったと見えて、イルはすぐにキトを見下ろして肩を竦めて見せた。

「読み終わっちゃってさ、今のは」

「……三年前には読了されていたと記憶しておりますが」

「だからほら、読み終わってる」

ではなぜ持って出たのか、というのは、言わなくても伝わった上で流された。

それはイルに関してキトが持つ疑問のひとつだった。彼は周囲を不安にするほど軽微な荷物を片手で持って国を出ただけれども、その中にひとつだけ、どう考えても必要のないものが混じっていたのである。それが、一冊の、読み古した本だ。キトの聞き込み調査によれば、イルはその本の内容を端から端まで空で言える。なのに

今もって、時間が空くと頁を繰っている。

「あるかどうか問題だがよ。もつとどでかい問題があるぜ。その前に」

ふたりの無言の攻防を遮って、マスクから問題提起がある。提起者を見たのはイルばかりだ。

「どうやって、あつこに入れてもらうかだな」高い場所に顎をしやくって、春の村の異形を指し示す。「やつらは外へ出る用がねえから、入る手段もねえはずだ」

確かに、外と通じた横穴は崖に散見されるが、一番低い場所でも四階の窓くらいな高さがあつて、そのくせそこから出入りできるような設備は見当たらない。黄土の壁は脆く手をかけるとぼろぼろと削れる。よくここに巣を作つて安泰に暮らしているものだと、逆に感心するほどで、素手でよじ登るなど危険極まりない。

するとイルは、ああ、と言つてその問題を棄却した。

「それは心配ないと思う」

「そりゃまた、どうして」

「だって」

ふと現れた蝶を追うように視線を上げて、イルは言い切った。

「あんたに会つて、リサがここに寄つてないはずがないもの」

彼の見た方向には、ぼつぼつと開いた横穴の口、些細な手すりを取り付けたバルコンのひとつがある。そこにいつの間にか、人影があつた。

「そしてここに寄つたあの人が門前払いされたとして、おとなしく引き下がったわけがない」

イルは人影に、愛想笑いのない軽い会釈をする。

フーエンはそれを受け、二本の尾をまとめてぴつと左に折った。サナで宮中式の礼をする影で、フーエンたちが……今ほどはつきりとはなかったが……同じようにしていたのを覚えていたから、それが彼ら一流の挨拶らしいことは見当がついた。彼が出て来たのはちょうど一番下のバルコンで、その表情がやはり愛想笑いのひとつ

も浮かべていないことはイルにも見える。目のいいキトには、色の薄い瞳に揺らいだわずかな驚きまで見通せた。

「これは喫驚」

わずかだからと言って、別段隠していたわけではないようだ。彼らはヒトに分かりやすい表情には乏しい種族である。

「ヒトとハハラの子が連れ立っている。はて客か、迷い人か」
ひとり言のような問いかけに、イルは答えた。

「ここを訪ねて来ました。入れていただくことはできますか」

「できぬではない。がちと時を要する」

「どれくらい？」

「それはそちらの運次第」フーエンは尾の片方をくるくる回す。「外と内とを繋ぐ法、最後に使われたのが今を去ること六年の昔ゆえ、どこへやったかよく思いつかぬ。腰を据えて待っておられよ。何なら登って来られても構わぬが」

「六年ってことは覚えてるのに？」

と、気に食わない顔をしたのはキト。イルは聞こえなかったふりをした。

「待ちます。よろしくお願いします」

「承知した」

フーエンはバルコンの奥に姿を消し、すぐまた現れた。まるで白い灯りが明滅したようだ。

「時に、ここへは何用か？」

「最初に聞かないのかしら、普通」

と、呆れ返るキト。

「閲覧希望です」イルはやっぱり聞こえなかったふりで、上に向かって言った。「こちらの蔵書を拝見したいんです」

「そうか」

それ以上探ることをせず、フーエンはまた奥へ消えた。今度は再び現れるまでに一時を要した。

待つ間、外の空気を吸いにだか数人がまったく別々のバルコンか

ら顔を出したが、最初のフーエンと似たようなことに驚き、似たようなことを言うのみだ。六年ぶりの来客は彼らにとって、特別なことでもないらしい。警戒心さえない。

「あいつらは不干渉の象徴みたいなやつらだかなあ」

とは、自称ザフィアの情報通の言である。

「あっちの方から欲しがるもんと言やあ、本くらいなもんだ。来たもんは入れる。来ないもんは知らん。張り合いのねえやつらだよ」

やがて最初のフーエンが現れたバルコンから、三つの人影が我れ先に飛び出してくると、それまでよりは高い声が上がった。

「ふむ、あれがハハラ族か」

「我らに似ず小さいものだ」

どうやら幾分若い連中らしい。物珍しげにキトへ寸評を加える。

「書の閲覧希望者というのは、あなた方か？」

「はい」

「三人ともか」

「まあ、いちおう」

「ではひとりずつ登って来られるがいい。一度も手入れしておらぬゆえ、ちと老朽している」

そう言っでするすると下ろされたのは、一挺の縄梯子。イルはそれを引っ張ってみて、かなりの不安を覚えた。古くさい植物の繊維のにおいと粉混じりの埃に似合いの、弱々しく伸び縮みする感触がある。それでいて、握ったところは乾ききってぱりぱりと剥がれる。

二三度ひやりとしながら縄梯子を登ると、最大の難関は最後に待っていた。もともと全体重をかけられるつもりでない手すりは今にも外れそうで、乗り越える瞬間に軽く転落の夢を見た。手を貸してくれたフーエンたちの肌は、日陰の岩肌みたいにひんやりしていた。考えてみたら、姿こそよく見たがあまり触れあった記憶はないな。イルは安全な場所に足をついてからそんなことを思った。

「入り用でしたら案内あないしますよ」

キトが肩で息をしている前で、若いフーエンたちが申し出る。並

んで立ってみると、皆イルより視線が低い。彼らは寿命が長いからひよっとしたらキトよりも年上である可能性もあるが、どちらにせよヒトの町には姿を見せない年齢であるようだ。

「来たことないん、だから、入り用に、決まってるじゃないっ」

「すみませんお願いします」

イルはキトの切れぎれのもの言いを封殺した。

外観同様、内部もまた春の村の名にふさわしく明るく暖かい。それは土中の横穴でありながら、イルのよく知る洞窟の光景とはまったく違っていた。黄土一色の壁から、床から、天井から、薄桃色の可憐な花をふんわり盛りつけた短い枝が生え出して、淡い光を放っている。指先ほどの大きさの五芒の花が、ひとつひとつぼんやりと光をたたえているのである。時折、花卉が散って輝きながらひらひらと舞い、土に触れては溶けて消えていく。

「きれい」

キトがぼうつと呟き、次いで様子を探るように言い直した。

「きれいですね？ イルさま」

イルは案内について歩きながら、視線をキトへ、それから前方へと流す。疑うみたいな目をして何か考えこんだ後、彼の下した評価は、珍しい、だった。

「見たことない花だ」

「サクラを見るのは初めてか？」

前に行くフーエンのひとりが、話を聞きつけて振り返る。

「ヒトは灯りを取るにも領知したる火を使うと聞く。まことならばサクラの要はあるまい」

別のひとりが前を向いたままそう言うのと、最後のひとりがうなずく。

「つまりこの花は、あなたたちの照明なんですネ」

「そう。ヒトが梧前灯下に書巻を手にする時、われわれは桜前桜下に文書もんじょを訪ねる。先人の言葉は多く紙の上にあり、紙は火によって消失するものだ。ヒトの世には火の元に書を読み、それを失した例

はないのか？」

聞いたことはないが、ないとも言切れない。

「あるかも知れないですね」

イルは肩の高さに突き出したひと枝に、そっと指先を触れてみた。花の光は確かに熱を伴ってはいない。いつそひやりとしている。

フーエンの住まいは、横穴で繋がれた丸天井の個室の連なりだ。

通路と部屋を仕切るものは何もなく、ちょっと目をやれば、中で食事をしていたり子どもが集まって勉強を教わっていたり、植物が栽培されていたりするのが見える。部屋かと思うと複叉路だったりもする。すれ違う人々は前の三人同様ヒトから見ると似たような顔立ちばかりで、幼子かそれ以上かの区別がつくくらい。手の代わりに尻尾を繋いで歩いていく親子もある。

道は入り組んでいたが進む方向は一貫していた。少しずつ道幅が広がっていると思うと、ちよつとした大通りほどになり、巨大な空洞に至る。キトが、はあ、と感嘆の吐息を漏らした。

部屋の中央から巨木の幹が一本伸びている。これまで見てきた部屋なら丸々押しつぶしてしまうだろう太さがある。節くれ立った色の濃い幹は上の方で急激に広がりながら細分し、その枝先のひとつひとつが小さな花の集りを宿して輝いている。通路を照らしていたサクラの枝と同じものだと分かったが、大きさが大きなのでとても同じには見なせない。乳白色の空の下にいるようだ。

「さて」

三人の案内役は、そこへ来て同時にくると振り返った。

「我らが誇る図書の部屋へようこそ。閲覧希望ということだが、何か目的の書があるのか？」

花の輝きに目が眩んで気付かなかった。空洞の壁には、いびつな形の本棚をでたらめな配置で埋め込んだみたいなやり方で、無数の本が並べられている。手の届かない高みの棚には詭^{あつら}えたようにサクラの枝が伸びていて、その先に止まって読書しているフーエンが見える。枝先の花がちょうどよい手灯りだ。

「ありますけど」

「何か」

「……呪法教典」イルは少し声を落とした。「二十九章」

下から、キトの怪訝そうな視線を感じる。三人のフーエンの表情は微動だにしない。

「六年前の来客というのも、それが目的だったのでは？」

「然り」

重ねて言うと、フーエンは重々しく首肯した。

「六年の昔、その書を求めて呪術使いの一団が訪ね来た。長きに渡る滞在の内に、ついに見つけ出すことはなかったが」

「外つ国の西、セン族の末裔。ヒトの世に呪い^{まじな}をもたらした暁の血脈」

「翼の助けを得て偽りの輝きより逃れし子ども。学ぶべきことを学びて今幻の領域へ手を差し伸べんとする……あなたならばあるいは、巡り会うことがあるかも知れぬな」

イルはどきりとした。その瞬間、彼らの目がいつか見たようなしっとりした笑みを浮かべた気がして。

「書と人の間は万事塞翁^{さいおう}が馬。あなたの求めるものがどこにあるか、ここにあるかないか、我らは我らから教授することをよしとせぬ。志あらば探すがいい。どちらへも、手の届く限り自由にして構わぬ」

「分かりました」

ありがたい、口の中で礼を述べたイルの顔は、心なしか赤かった。

「……なんで知ってるんだろう？」

「何をです？」

案内と別れてサクラの威容を見上げつつ、釈然としない面持ちで呟く。キトには打ち明ける気にもなれない、フーエンに絡んだ恥ずかしい思い出が彼にはあった。

「しかし参ったな。あるかどうか分からないまま探すなんて」

「話したくないのならそうとおっしゃって下さい」

あざとい話題転換にキトは丸い頬を膨らした。イルは飄然として

気にしない。

「あるかも知れないというのは本当なのですか？」キトは主の態度に憤然ながら、やはり意に従う。「わたくしも呪学者の末端に席を置く身でございます。幻の二十九章、聞いたことくらいはございますが」

「そりゃ珍しい本なのかい？」

ぼりぼり顎を掻きながらのほほんと口を挟んだマスクに、キトが聞こえよがしに言う。

「希少も希少、むしろ、ないと証明できないからあるかも知れないって言ってるだけよ」

皇帝の図書室にも学校の蔵書庫にも、およそ本を管理している場所であれば呪法教典のひと揃いはある。が、そこにあるのは二十八章までだ。学識者の間でまことしやかにささやかれる最終二十九章の存在は、伝説や空想の域とも言われる。

「ないならいいいい」

サクラの木に向かい、イルは光を吸い込もうとするみたいに、深く息を吸い込んだ。

「でも書いてあるとしたら二十九章しかないと、ぼくは思ってる」
六年前にここを通った皆も、だから探したのに違いない。彼らとイルの目的は同一ではないけれども、探求するもの自体はまったく同じなのだ。

風の前3年 冬 春の村 〈想い出の降る〉

「文字を？」

初めて「勉強がしたい」と言った時、父は意表をつかれたようだった。イルはその時五つになったばかりで、父とは親子になったばかりで、よそからやって来てやっと喋り言葉に慣れたばかりだった。「どうしたのだ、いったい」

そんなばかり尽しで欲張りを言っただろうか、幼いイルがそんなふうに氣遣ったわけではないが、改まってどうしたと言われるとなんだか大それたことを言った気にはなって、身を引きかけた。父はただ、あまりに時宜を得た申し出に驚いていただけだった。

「じゅ、ほう、きょう、てん」

父が見せてくれた一冊の本は薄い割に装丁が立派で、濃緑に浮き上がる銀色の文字からは子ども心に大人の雰囲気を感じたことを覚えていた。表紙に書かれた、書名を表すに違いない文字列を父に付いて辿ったのが、イルが文字を読んだ最初だ。

「これまでに暗唱した文章があるだろう？ これはその文章を収めてある教本だ。内容を諳んじているのだから、文字を覚えるにはちようどよからう」

その日から、父は空き時間をイルの識字教育に充ててくれるようになった。年寄りの書き文字は真似ない方がいいと言って示範してくれることはなかったけれども、ペンの持ち方は手ずから教えてくれた。

イルが父から直接教わったこと。それは呪術の基礎と文字の読み書き、ささやかなボードゲーム。

それから……。

「イルさま！」

真下からの声に呼び戻されたので、イルは幻の声を頭から追い出した。

「三章と十八、十九章を発見いたしました」

サクラの枝が乱雑な螺旋の形に折り重なって、その隙間から床の黄土色とキトの顔が覗ける。彼女は……種族の特徴のせいも多分にあるだろうが……木登りがてんでできない。手の届く範囲の本棚をぐるりと見てきたところだ。

「ああそう」

ちょうどまん中あたりの高さの枝先から、イルは半分生のような返事をした。

イル自身が発見したものと合わせてこれで七冊。この広大な図書館は間違いなく、続きものを続きものとして並べて置いていない。

「じゃあ、下もよろしく」

「承知いたしました」

ぴよこりと一礼し、図書館内にあるまじき足音をたててばたばたと去っていく。特にうるさいとも言われないが、フーエンたちの話し声とは普段からささやきか鼻唄のようであるから、何か取り決めなくても自然森閑としてくるらしい。広い場所にそれなりに人がいるのに、ここは静かだ。

キトに任せた下というのは、階下の図書のことである。イルの登ったこの大木は床を貫いて遙か下に根を張っており、幹の中に空いた空洞は螺旋階段を抱いて、何層も重なった階下へ繋がっているのだ。この木を取り巻くその空間、すべてが図書の部屋。それが何階分あるのかは、下りてみないと分からない。

ひとりでさわがしいのが消えて、淡い光の内に静寂が戻ると、イルは手の中の本に目を落とした。

教典の第五章。

「読む前と返す時に届け出ること、必ず元あった場所に返すこと、書架から持ち出さないこと」

これを初めて読むことになった時、父は他の本の時にはさっぱり言ったことのない厳しい決まり事を言い付けた。

「内容は他言無用……うむ、そうか……関係のない人間に教えては

ならないという意味だ。紫紺の制服の者ならば問題はない。あとの者には一行たりとも教えることはならん」

五章審判の法を筆頭に、結界の法、転換の法、呪道の法に未完成である呪療の法の研究史。以降記載されている事柄のすべてが、攻撃の術あるいは科学研究に用いられる理論に触れている。いずれも使用法次第で非常に危険なものになるから、エンドでは呪術寮と皇帝の許可を得た者以外は閲覧を許されない。そんな事情はどこ吹く風の幼児であったイルにしてみると、単純に、いつもどおりに、父の言い付けを守ったに過ぎなかったのだけだ。

古い本はかつてそれを読んだ時の記憶を呼び覚まして、なかなか手を離れない。人類に共通して書棚の整理が覚えのないのは、ぜんぶ本の持つ記憶のせいだ。

「あっ」

自棄のように閉じた勢いで、本が滑った。咄嗟に差し出した手が樹上の均衡を崩す。

イルが敵と対して超短期決戦を旨としているのは、長引くことそのものが危険であるのと同時に、長引いて後手に回るのが上手くないからである。相手の動きを受けて自分の行動を判断するといった決定と実行の間隔が狭められる条件はまずい。体が、追いつかない恐れがある。

かくいう事情をこの場に当てはめた結果として、イルは本と一緒に滑り落ちた。

「……大事ないか」

受け身など取れるわけもなく、背中から墜落した男をフーエンたちを取り囲む。

「ご心配なく……」

痛みをやり過ぎるべくぎゅっと閉じた目を開くと、四つ五つの顔が並んで影を作っている。上から……枝を揺らしたせいだろう……白い光の粒がさかんに降ってくる。引き寄せられて差し上げたてのひらに、花びらが落ちて染み入る。染み入る箇所が、しん、しん、

と心地よい冷気を発する。

雪みたいだ。

「雪……？」

胸の内から溶け出した言葉に、自分で首を傾げた。

雪は東の山が被っているもので、上から降ってくるものではない。少なくとも、イルは雪の舞っているところなんて見たことがない。こんなふうには、真下から。

「お兄ちゃん、だいじょうぶ？」

波の引くように去ったフーエンたちの後に、まだ誰が残っていたらしい。ずいぶん近いところからかわいらしい声がしたと思ったら、小さな子どもがふたり並んでしゃがんでいた。だいじょうぶだよ、と曖昧な声音で答えてから、イルははっとして子どもの顔を見直す。ヒトじゃないか。

「これ、落っこちてきた」

「お兄ちゃん読んでたの？」

わずかばかり年下らしい方が、ちょっと恥ずかしそうにしながら緑色の本を手渡してくる。呆然としたまま受け取ると、きゅんと言った年嵩の方の後ろに顔を隠した。

「ね、知ってる？ これ」ヒトの子はイルの手の中を指差して嬉しそうに続けた。「『審判』^{ジャッジ}って言うの。ばくらもう読んだよ」

「それは否定カンショウのタイショウをセンチテイすること。術式の解放をゲンテイすることにあらず……えーっと」

等しく延べ等しくならし、対象のみ輪郭を認め、もって衝突を起^きして干渉と成すものなり。

「よく覚えたね」

条件反射で浮かんでくる文章に蓋するように、イルは体を起こしながらそう言った。昔自分が言われたことを、そのまま繰り返すのは奇妙な気分だ。

「頑張ったんだよお」

「熱が出るかと思った」

褒められたかったことを褒められた、素直な笑顔を浮かべふたりはこくこくとうなずきあう。

「でもね、怒られるよりいいもんね」

「怖いでしょ？ 怒った時って」

教典の勉強の上でそんなふうに言われると、イルの中で彷彿とするのはたったひとり、父だけだ。が、そんなはずはない。過去に引きずられがちな己の思考を断ち、わずかの沈黙を不思議そうに見つめている子どもたちに対し義務的に問い返して、

「誰が？」

「ロクーズだよ」

思いがけない返答を得た。

突然に、よほど当たり前みたいに言うから、かえって驚く隙がなかった。そう、とまた明るくない声で返事すると、お兄ちゃんは違うの？ と無邪気な質問がきた。イルはどこかが痒いような、なのにそれがどこか分からないような、取るに足らない不快を浮かべて彼らを均等に見据える。

小さな世界。子どものころには確かにあった、すべてが必然で等価値である世界。彼らはまだ、その住人らしい。

「別に覚えようと思って読んでたわけじゃないよ。ぼくが読みたいのは、これじゃないんだ」

「何か探してるの？」

「うん」

「何？」

きらきら光る好奇心の目。

「これの」その目の前に、五章を掲げて見せる。「二十九冊目」
「ああ！」

年上の方が手を打った。もうひとりと肘でこづきあうと、

「お兄ちゃん残念だね。ちょっと前まではここにあったのに」

相手の欲する情報を知っていた喜びに満ちて、得意げに言いきる。
「もうないよ。ロクーズがジェイたちと一緒に持ってっちゃったも

ん」

「ジェイ？」その名をどこで聞いたか、思い出すには数秒いった。

「……エミとか？」

「知ってるの？」

「いつ？ それ」

「ちょっと前だよ」

子どもの時代の時の流れは遅い。彼らのちょっと前ならば、本当にごく最近に相違ない。ふたりの年齢からしても、六年昔ではないはずだ。

「そう」イルは微かな笑顔を作った。「助かった。ありがとう」

改めて礼を言おうと、ふたりのヒトの子どもはぱっと笑い、手を取り合って行ってしまった。幹の中へ入っていったから、まだ勉強するのだろう。幼い方の年頃を想像して、彼はもう自分で本を読むんだろうかとふと考えた。ちょうどイルが、自分は文字を読めないということに自覚したところと同年に見えた。

床に座ったまま、目でマースクを探す。彼は読書なんてしそうな無頼の姿をしながら、情報通を名乗るくらいで活字は読むと言う。さすがに呪術の専門書に目を通したことはないようだが、探すのには快く手を貸してくれた。今もどこかの花に紛れているのに違いない。ざっとでは見つからないか……と思ったら、雑な足さばきで床を振動させながら、先方みずから寄ってきた。

「おいおい、どんなまぬけが落ちたのかと思ったら、あんたかよ」

減らず口には耳を貸さず、用件だけを端的に告げる。

「キト、呼んできてくれる」

「あん？」

「ここにはないらしいから。探すのはおしまい」

「なんでえ、どうして分かったんだいそんなこと」

「あとこれ、その……あの棚の下の段に返しといてくれる」

「ああ？」

不平ったらしい声を見捨てて本を押しつけ、イルはゆっくり立ち

上がる。乳白に覆われた天井を仰ぐ。凜と固まっているかと思うと、ひらり、はらり、思い出したように花びらが舞う。

「ねえ」

「なんだよ」

大人しく本を返しに向かわんとしていたマスクが、引き止められていよいよ機嫌を悪くする。

「ザフィアには雪は降るの」

「そりゃあ、寒い町にゃあ降るだろうさ」

「こんなふう？」

「さてね。俺も見たことはねえや」

花びらが落ちるたびに、他人の記憶を思い出すような疼きがある。けれど、肌や床に触れて光が消えてしまうのと同時に、思い出しなかったものも溶けてなくなってしまう。これは感じるとおり、他人の記憶なのだろうか。それとも本当に自分の頭の上に、こんなふうに雪が降ったことがあったのだろうか。いったいいつ、どこで……？

「はて、ずいぶん早く引きあげる」

三人が揃って出立の旨を伝えると、フリーエンははんなりと問うた。最初に会った三人など探しようもなかったから手近にいた者に声をかけたのだが、なんら躊躇なく応対してくれる。誰を選んでも皆同じことを把握しているようだ。

「探し物は見つかったのか？」

「はい」

状況の飲み込めていないキトと、顎で使われてふて腐れ気味のマスクを両脇に従えて、イルははつきりとうなずいた。

「どうやら、ぼくは二十九章とは縁がありそうです」

「豪気なことよ。鳥と木とは古来関係深きもの。サクラの木はここより他にも何本があるが、あなたならその中から正しいものを選ぶは易かろう」

「だいいいですね」

話が済むと、フーエンは出口まで送ろうと言い出す。イルはそれを、作った笑顔で差し止めた。

「帰りは別の道を案内していただけると、嬉しいですよ」

細長い目が寄って眉間にしわを作り、二本の尻尾がばらばらに円を描く。

「あの縄梯子はちょっと心臓に悪すぎるので」

驚いているらしいその反応から、もうひと押しとばかり付け加えると、

「……さて、導きとは恐ろしいものよな」

言葉どおり恐れているような目で見、フーエンは向けなかった足をくると逆にした。入った時とはまったく別の土の道を通されると、サクラの空洞を抱く断崖から少しく離れた平地へ出た。これにはキトとマースクも、仲良く素直な驚きを浮かべていた。

存外長い間中にいたようで、空はそろそろ暗色を呈しはじめていた。

風の前6年 冬 サナ く夕さりく

夕刻、いつもの場所で。昼間告げられたアーテスの言葉に、イルは従う気がなかった。何も言わずに家にいた彼を、追い出したのは妹だ。

「すごいや、ほんとに来てくれた」

いつもの場所……街の東端、ユイの大草原と接する廃材置き場。鉄くずの山のひとつから、見知った顔がたったひとり、ゆらりと現れる。

「タラは強いなあ」

手を回したのは自分である、ミチは、そんな含みを込めてくすくす笑った。イルはその姿を見てわずかに眉をひそめる。いつもの青い制服ではなく街に暮らすような麻の上下。左右の手に、そっくり同じ剣がふた振り。

「驚かないね。アーテスの名前で呼び出したはずだけど？」

どこか残念そうにそう言われ、イルは無言のまま視線だけを街灯りの方へずらす。タラが知っていた時点で、この件がアーテスひとりの思いつきでないことは確実だった。タラは育ててもらった家の実子で、仲間内で末っ子の立場にあるイルにとって、唯一絶対的な庇護の対象である。よってこういう場合には、彼の最大の弱点だ。いつもの泣きそうで泣き出さない調子で、どうしても行ってくれないの？ などと言われたら、残念ながらイルにはもうなす術がない。「なんの用？」

問いかけに、ミチはいつもの底の知れない笑みを浮かべてつと黙る。返答は投げて寄越された剣だった。

反射的にそれを受け取ってしまったから、イルははっきりと苦渋を表す。

「……ミチ」

「快気祝い」ミチは手早く自分の剣を抜き放つ。「いいね」

それは確認ではなく、開始の合図。

ミチは最初から全力で打ち込んできた。

「ちよっと」イルはそれを、身のこなしで避ける。「やらないったら！」

言葉で拒否しても、ミチは手を止めない。イルは鞘の首を逆手に握り、闘争心の欠片もない困り果てた顔をして、剣先すれすれを逃げ惑う。困り果てたのは気の進まない打ち合いに巻き込まれたせいであり、まったく別の自覚のせいである。目覚めてから初めて全力を尽くすのを余儀なくされた瞬間に、彼は苦い確信を得ていた。かねてそんな気はしていたが……体が、うまく動かない。

回避数回、イルはすぐに追い詰められた。避けきれない、頭がそう判断してから手が鞘を上げて受けるまでに、覚えのない隔たりがある。鉄同士のぶち当たる、火の爆ぜるような音。受けたのはぎりぎりだった。

「ほんとに抜かないな」

黒鉄と白刃の交差を崩さぬまま、ミチが目の中を覗き込む。

「お前最近、剣から逃げてるらしいね」

「……別に」

「なんで？」

自分のしたことしないこと、相変わらず皆に筒抜けだ。イルは苛立ちに舌を打つ。やはりそういうことなのだ。キトも鍛冶場の兄妹も、この三月イルがやむなく接してきたすべての人間が今に繋がっている。土台には、ずっと接触を避けてきた仲間たちの存在がある。……いらいらする。

目が今この時に集中しない。耳もまた、まったく別の音を……今ここにありもしない声を……創りだしては聞く。それは、五年の時を経て戻ってきたイルに投げかけられた、様々の人の声だ。

皇帝や宮中の知り合い、彼らの見知らぬ連れ合い、カイロのまた少し年老いた声と、何年も経ったのが嘘のような変わらぬボボの囁れ声。おっかなびっくり宮殿に登ってきた兄代わりのタズの、ひさ

しぶりに聞いた優しい声。でっかい兄の体の後ろから家に帰ろうと言ひ募ったタラの、泣きそうに泣き出さない声。

一閃、また一閃。切りこまれるたびに、体勢が崩れる、反応が遅れる。頭の中で、声たちが重なって不協和の渦を巻く。うるさい。ひどくうるさい。

止むに止まれぬ想いのすべてを閉じ込めたような声で、よかった、と言ったロン。

見たこともないほど取り乱し、泣きじゃくったアーテス。

助けられなかった――はじまりの言葉と一緒に蘇る、細長い不吉の影。互いを否定しあう黒と白。同じ金、同じ青に宿る、まったく異質の魂。半分に欠けた体で鮮やかに微笑む真っ赤な唇。彼女がこの身に刻みこんでしまった、消えない呪詛。

『もう、遅い……！』

……うるさい！

左手に移った鞆で一撃を弾き返した直後、イルはどうとうそれを手放しかかった。しつこくつきまとう何者かを振り払う激しさで、乱暴に、無造作に、地面に叩きつけようとする。

ミチはその兆候を見逃さない。

彼は唇を真白になるほど噛み締め、そこにありったけ祈りをこめて、親友の首筋を突き通した。

人が何かを強く願う時、それはまるでイル自身の望みであるかのように振る舞って身の内に沸き起こる。ミチが抜いてくれと願ったのか、イルが抜かなければと思ったのか。それも判然しない内に、刃から鞆が剥がれ落ちた。ほとんど同時に、右耳のすぐ下でそれまでより一音高い剣戟が起こる。三月も伸ばしたままだった襟足が刀身の競り合いに巻き込まれて、はら、と散った。

耳中に響く余韻が頭の中をひっかき回し、自分と相手とがますます渾然とした。そして次第小さくなるのに合わせて、イルはイルに戻っていく。静寂が満ちて、我に返る。きょんととして、間近に迫ったミチを見下ろす。

穏やかで掴みどころのないミチは、不似合いな度の過ぎた緊張がべっとり張りついた目で、じ、とこちらを見上げている。強ばったその顔を、互いの乱れた呼吸の作る白い塊が隠して、また現す。

と思うと、赤毛の頭が急にかくんとうなだれた。いや、首だけでなく腰から砕けた。

「ふいー……」

ばかりか、空気漏れみたいな声を出してそのまま草の上に仰臥した。剣をおっぽりだし、両手で顔面と短い髪とをくしゃくしゃにし、手の下から掠れた声をこぼす。

「怖すぎだよ、もー……」

柄を握ったイルの右手には辛うじて受けた衝撃が響いて、過敏になった肩の傷跡がひどくじんじんした。何度も打ちあった相手だから、それがかつてない力を込めた一撃であったことが分かる。

受けて逸らしていなければ、刃先は確実にイルを殺したろう。

「なんのつもり」

「お前の方こそなんのつもりだよ！」

呆然尋ねると、ミチは跳ね起きて喚いた。

「なんで仕事しないのさ。なんでみんなと会おうとしないのさ。前は誰に隠したって、ぼくらにだけは話してくれたのに。なんで何も言わずに離れてくようなことするのさ！」

イルは答えない。答えられない。だらりと下ろした腕に不意に鉄の重みを感じ、いたたまれないように目を伏せる。

剣を抜いてしまった。なんて久しぶりに。

「みんな納得しっこないよ」ミチが苦しいように息をひそめる。「今日、もしお前が……まともに応じないようなら、ぶっ殺してもいいって言われてたんだから」

「……何それ」

「そうでもないよ、お前こっち向いてくれないんだもの！ ね、お願いだからちゃんと話しよう。誰かひとりにだって構わないから。ほっといてくれなんて、そんなのはなしだよ」

相手の必死さが伝われば伝わるほど、イルは、苛ついた。じっと見つめる目から目を背け、ミチの背後に広がる街と人の気配から逃れて空を見上げる。滑らかな蒼穹にココとノノが当てる端切れみたいなほつれた雲が散っている。山の方角はもうすっかり黒いのに、天の高いところには、ドロシーの使う花の染料のように明るい黄色がわだかまっている。どこまでが黄色でどこからが黒なのか、境目は確かにそこにあるはずなのに、どんなに目を凝らしてもどこかではぐらかされてしまう。

話すことなど、ないと思った。けれどすぐに、違うと思い直した。ミチたちが聞きたがっているものはイルの胸の中に確かにあるだろう。ただイルの方が、それを話したくない、知らせたくないだけ。「友だちだからって……なんでもかんでも、話すのがいいとは思わない」

それだけ言うので、やっただ。

「イル」

ミチが悲しそうに呟いても、苛立ちが募るばかり。イルは剣を収め、無言のままミチに差し出した。受け取れないと知ると、草の上にとっと置く。

そのまま立ち去るつもりだった。そうでないと、今にも何か言ってしまいそうだったから。けれど、それは叶わなかった。

「やあっぱり。何か思っているんじゃないですか」

曖昧な色をした天からきっぱりとした声が降ってきたのである。ミチが口惜しそうなしかめ面をする。イルは声のした方を振り仰いだ。それは半端になった石材を塔のように積み上げた、石の山のてっぺんからだった。

「イルさまは嘘つきでいらっしやいます。何も思っていないとおっしゃったのは何時間前でございますか？」

高いところからばか丁寧なイルを罵ったのは、キトだ。

「そりゃなあ。お前とミチくんとじゃ、言えることが違ってくるだろ」

そのさらに上に、宮殿の制服を着た何者かがある。暗い上にわずかに残った光を逆に受けているので顔がよくは見えないが、服の色は品のいい紫だ。

「心外でございます。毎日毎日、通い妻か！ てくらいに通い詰めているわたくしに対して秘匿なさることがあるなんて」

「キトが勝手にそうしてるだけだぞ。いちおう言っとくけど」

ふたりはなんやかや言い合いながら、覚束ない手際で山を下りてくる。

「お手前、しかと拝見いたしました。ミチさま」

ミチもまたアーテスの朋友の一らしく、キトの言葉は丁寧だ。

「いやあ、ひやつとしたね、実際」もうひとり、ミチにややひねくれた印象の微笑をくれる。「あれって本気で“ぶっ殺す”気だったの？ それとも玄人の気迫？」

「本気も本気ですよお。こいつ、そういう勘だけは鋭いんだから」

「ひえー。おっそろしい友情だな、お前ら」

自分で自分の肩を抱いて震えて見せる、その横顔をイルは思わずまじまじ見つめてしまった。視線が当たったか、先方もまたイルに目を向ける。と、その目に何か挑戦的なものが浮かんだ。やはり斜に構えた印象の足取りですいすいと正面に寄ってきて、

「あれ」黒縁眼鏡の奥で、細い目をさらに細めた。「お前ひよっとして、まだ背え伸びてる？」

こうして改まって見下ろすのは初めてだったが、目を見たイルは確信を得た。

「……ヤチア？」

「おお。覚えてたよ。見ろキト、イルはお前の言うほど薄情じゃないんだって」

嬉しそうにそう言われ、自分で呼びかけておきながら信じられずに、イルは何度も相手の顔を見返した。何度見たところで……十五年の歳は取っても……面影がはっきりある。イルがまだ皇宮に預けられていた幼い時、よく世話になった呪学者だ。

「どうして」

どうして今ヤチアがここにいるのか、なぜキトと一緒になのか……当然の質問を投げかけようとして、イルは急に、沈黙した。思いとどまったのではない、言葉を発することができなくなったのだ。

指先一本でひっかかっていたものが、ずる、とはずれる感覚。しまった、と思って逃げることができない。ミチが見ている。キトたちも見ている。こんなところで「あれ」を起こしたら、後で何を言われるか。

「こういう時のためにだ」

異変を察したらしいヤチアはしかし、泰然としてイルの疑問の片方に答えた。

「激しい運動を強要するからには、きちんと後保護しないと」

こうなることは分かっていたという物言い。倒れかかるイルを、先回りして支える。慌てて立ち上がったミチがそれを助ける。

わけが分からなかった。けれどそれも、続きに繋がっている保障はどこにもない。これは終端の再現なのだ。あの時、南の地でイルが最後に意識を失った時と、その感覚はあまりにも似ている。次に目を覚ましたら、今度は何を失っているのだろう……そう思うと、怖くてたまらない。

空がとうとう、ふっと真っ黒になる。雲が広がったのか、一点の星もない。

風の前3年 冬 タティ くものを買うく

麦や野菜の植わった畑の間に、石壁に丸屋根の小さな民家がぽつりぽつり、申し訳なさそうに縮こまっている。畑に出ている人がいくらかあるが、彼らも木の一本かかかしたみたいに気配がなくて、あまり人気を感じない。はずれにぽつんと停めてある黒っぽい荷馬車が、場違いに巨大だった。つなぎっぱなしの二頭の馬が、足許の草を食んでいる。乗り手だけが突然消えてしまったみたいで、滅びた文明の遺産めいて見える。

「まとめてもらってくれるからね、八千五百オンにまけとこう」

平穏な村の中で一カ所騒がしいのは、家畜を飼っている一軒だ。肉類を扱っているのがそこらしいと言っているので、イルたちは立ち寄りざるを得なかった。イルもキトもあまり肉を好まないが、満遍なく栄養を摂るのは長旅では重要である。さらに今は、肉しか食わないような男がひとり混じっているから、もはや必須の食料なのだ。

次の人里までの道程に、余裕を見てひと月分。保存がきくように天日に干された肉は、その手間分値を上乗せされた上、量が量だけに高い。

「しかしまあ」支払いをするイルの後ろで、マスクはしきりと感心している。「世の中には不思議なこともあるもんだなあ」

「あんまり、つつこまないでくれる……」

肉屋が他より騒がしいのは普段からかも知れないが、この時は確実に普段に増してうるさかったに違いない。三人が訪ねたと同時に、小さな檻に入ったウサギや羊や大柄な犬のようなもの、しまいに建物の外にある牛舎の牛たちまでが、不機嫌そうに喚きだしたのだ。

「なんだろうね」肉屋の男も不思議顔だ。「すまんね騒々しくて。いつもはこんなじゃないんだが」

「でしようね」

訳知り顔で受けるキトに、もの珍しげに檻の中を観察するマースク。イルは傍らで牙を剥く犬と目を合わせ、肩を落とす。

イルは動物嫌いではない。しかし悲しいかな、動物がイルを嫌いなのだ。それは、ある意味で人に嫌われるより悲しい。いつもならもうひとしきり落ち込むところなくらいだ。

が、しかしこの時イルにはまったく別の懸案事項が降って湧いていたので、長くは悲しまなかった。

その問題は、取り出した財布の中から湧いて出た。

「いかがいたしましたか、イルさま」

買い物が済んでもイルがなかなか財布をしまわず、絞りの口を開いたままちらちら中を気にするので、キトが恐るおそる尋ねた。

「いや、別に」

イルはいかにも不自然に目を背け、取ってつけたみたいな仕草で財布を懷に投げ入れた。

見ないでいい真実なら見ないに越したことはない。ただし、いつまでも見ずに済むかどうかは、次の店に乗り込んでみなければ分からない。

「道中氣をつけてな」

旅の無事を祈る言葉に形式的に礼を述べ、イルは急いで歓迎されない場所を離れた。教えてもらったとおり、近隣のとある小さな一軒家に足を向ける。

この農村の店屋は看板を出していない。それもそのはず、外部と交流を持ちはじめたとは言え、ここまで南に下った場所にはまだまだ商隊や旅行者の足は届いていない。商売相手は村の者同士か、よそからの客があっても決まりきった顔なじみばかり。そんな情勢を考えるにつけ、よくこんな場所に目当てのものが売っていたなどイルは思う。村の中で、イルとキトがこれから買い求めようとしているものに用のある人間などいないはずだった。

辿り着いた家の入り口は石の壁に入った切れ込みめいて、縦に長く、横には非常に狭かった。一番大きいやつが入れるかどうか際ど

い。が、先頭は一番小さい方で、彼女がイル以外を氣遣うことはないので、玉の簾すだれを押してさっさと入って行った。

「……行けそう？」

切れ込みの幅を目で測りつつ、イルはいちおう聞いてみる。

するとマスクは、なぜかぷつと吹き出した。

「なに」

「いやあ。反応が目に見えるから言わん」

イルはその発言に対し、金輪際こいつのことは氣にかけないと心に誓い、無言でキトを追った。慌てて宥めすかしながらついてきたマスクが、入り口に肩をひっかけてなかなか面白い動きを余儀なくされる。イルはだが、肅々と誓いを守った。

中は同業の店舗一般の例に漏れず、薄暗くて、昼間の屋外に慣れた目はしばらくありもしない緑色の球を映し続ける。その向こうに見えたり消えたりするキトの影は、高い天井を突き上げるような戸棚の列をかくぐって、奥の方を覗き込んでいるらしい。耳たぶの尖りがぴくぴくと方向を変え盛んに氣配を探ったかと思ったら、不意に大きな声で呼びかけた。

「こんにちはー！」

この狭いのになぜそう叫ぶのかと、キトの見ている方を覗いてみる。作業台らしい石卓は無人で、その傍らに地下への階段が口を開けていた。

「いるの？」

「います。ヒトです」

ハハラの勘は鋭い。少しして、下からひとりのヒトが這い出してきた。階段があんまり暗いので、土中からいきなり生えてきたように見えた。

生えてきたのは、中年の女性である。

「驚いた」女性まじなは驚いていた。「ほんとに人が。うちは呪い草の工房ですけれど、どこかとお間違いじゃございません？」

「いいえ」

キトがきっぱり答え、機敏に腰を折る。

「突然の訪問で失礼いたします。薬師のキトと申します」

「あらあら。じゃほんとに、わざわざうちまで草を買いにね」

それでようやく、女性は全身を地上に現した。ふくよかな体に緑の前掛けを巻き付けて、人の良さそうな丸顔を乗せている。

「うちのお客さんは、ずうっと西の街なんですよ」

女性はアレンカと名乗った後で、そういう説明をくれた。

「月にいっぺん、大きな荷馬車が来て街で必要なひと月分を買い上げていくんです。自分でここへ買いに来る方は、とんといらっしゃいませんので。失礼しました」

周辺の通年涼やかな気候が原料となる草木を育てるのに適して、質の良いものができるので、遠路はるばる買い付けに来る街があるのだと言う。

「個人じゃ売ってもらえないんですか？」

「いいええ、そんなことはございません。でもそういう商売なもので、作り置きがないのでね。今ご注文をいただいて、それから作りますから、ものによっては数日はいただかないと。何をお求めですか？」

アレンカとキトが、本草の専門的な話を始める。イルは手持ち無沙汰に周りを見ながらやり過ごした。

店舗と言うより倉庫みたいにやたらと棚を並べていて、その全てが石で出来ているから、室内全体が気持ち冷えびえとしている。薬草には湿気と熱気がよくないらしいことは知っているが、木炭が一緒に並べてあったり束ねて逆さに吊ってあったりするのは、いったいなんの意味を成しているのかさっぱり分からない。ただところどころ、包み紙や張り札に書き付けられた『式』を解読できるくらいだ。

「作成に三日必要だそうです」

キトが唐突に、真下からイルを見上げて言った。ひと房の薬草にかかった帯の『式』の解読に躍起になっていたイルは、やや大げさ

に肩を揺らした。

「ああ、そう」

何を言われたか理解して、はつきりしない声で返す。必要日数もいいが、それより重大な問題がふたりにはある。それが後に続くだろうことを予期しての、現実逃避の間。

「……で？」

「必要最低限、予備の分はゼロにして試算をお願いいたしました」
「キトは淡々と報告義務を果たした。」「五万で精一杯だそうで」

現実を見ないままにしておくわけには、やはりいかなかった。

イルはいつにない真剣な口調で、キト、と宣った。キトも思わず畏まってはいと答える。ついに真実は白日のもとに晒される。

「お金がない」

「それは、以前からですね」

「本格的にない」

「とおっしゃいますと」

「足りない」

「……」

ふたりが彫像と化したころ、マスクがなんだなんだとやにわに加わった。今の今まで入り口で四苦八苦していたらしい。

「金がねえ？」大男はその危機感をまったく共有しなかった。「んなの日常茶飯事だぜ。むしろあった試しなんざないね」

「知ってるよ」

イルは低い声で吐き捨てた。マスクはそも金のなかったのが縁で同道しているのだし、いまだかつて旅の出資に心ばかりでも協力したことがない。おかげで彼を加えてから出費が五割増した。

「なんだ、いくら入り用なんだい」

「五万」

「五万！」

途端、男の目の色が変わる。五万あれば、ひとりでひと月、かなりいいものが食べられる。

「んなでかい金額、なんで別にとつとかねえんだ」

「いきなりまともなこと言わないでよね」キトは丸目を吊り上げた。
「あんたの食費っていう予想外の出費が加わったせいで、予定が狂ったのよ」

マスクは自分がいかに小食かを主張したが、誰も賛同しなかった。彼は確かに体格に比して小食かも知れないが、その体格が他ふたりを足して二倍したほどもある上、飲むからいけない。

「そう言やあ、今まではどうしてたんだ？ 何か稼ぎのあるようにや見えなかったが」

「国を出る前に持ってた分で保たせてたの」

ただ、持っていた分がザフィアに入ったと同時に価値を半減させた。

エンドとザフィアの経済はかつてまったく独立していた。行き来が始まってから十年と経っておらず、流通は黎明期のそのまた初期の段階。イエンゼン、エンドの二国とザフィアとの境界では、それぞれに異なる通貨を引き換える商売が無秩序に乱立していて、彼らの胡散臭い力を借りなくては通貨が手に入らない。確固とした相場の決まっているわけもなく、思いつきり足許を見られた結果、イルとキトの財産は為替の闇に半分方落ちてしまったというわけだ。

キトの学問は経済を説明してはくれない。イルとて職人育ちで、金の損得なんか考えたことがなかった。同じ金なのに価値が変わるとはこういうカラクリなのか、今もってふたりとも理解していない。彼らに分かるのは、今現在必要な経費がないということだけだ。

「呆れた無鉄砲だな。旅路の空の下じゃ自分を守るのは自分の知識だけだぜ」

「だからやめてよ、いきなりまともなこと言い出すの」

「どうあれ、いつかは尽きる蓄えだったってこつたろ。俺みてえに、うまあく人様の世話になるのが無理なら、自分で稼ぐ手段は持たなくっちゃあ続かねえ」

人様というのが現状自分たちであることを苦々しく思いつつ、

「稼ぐ稼ぐって言うけどさ」

イルは薄暗がりの一隅に向かってぼつりと疑問を漏らした。

「お金を稼ぐって、何することなの？」

「ああ？」

「それはいろいろでございますよ、イルさま」キトが慌てて講釈する。「ものを造って買ってもらうのが一番一般的でございますね。」

ここの方々のように作物を育てて売ればお金になりますし、材を仕入れて道具にするのも仕事です。イルさまだって剣をお造りだったんでしょ」

「そうだけどさ。ぼくがここで剣をひと振り打ったとしたって、買手がつかないじゃないか。よそのお客を取るのは筋違いだよ」

それはイルの第二の父とも言える鍛冶屋のバンスが、口酸っぱく言い聞かせてきた教えである。職人と客の間には代々続く信頼関係がある。それに横槍を入れるのは、サナの職人の間ではもつとも恥ずべき行為だ。

「それはそうでございますが」

職人ではないが、エンドに暮らして長いキトにもその辺りの常識は通じる。

「となると……なんでございましょうねえ？」

そしてまた、家業を継ぐか国に仕えるかくらいしか知らないのも同じだった。

「どんなご身分の坊ちゃんかと思ってたらまあ」やりとりを聞き届け、マスクは失笑だ。「従者ともどもとんだ世間知らずだぜ。よく今まで無事に生きてたな」

「身分なんかないし、こいつは従者じゃない」

細けえことは気にするな、と大男は大手を振り、振ったその手でイルの背中を勢いよく叩いた。彼は彼なりのとっておきの発言をする時に、よくこれをやる。その力加減はいつもキトをひやりとさせる。熊の腕力ならイルなど折るのは雑作ない。

「普段世話になってる礼だ。ひと肌脱いでやろうじゃね」

「遠慮しとくよ」

「はええな相変わらず!」

面倒ごとの気配を察して、イルは全身で拒絶を示す。普段ならそこで会話が断ち切られて終わりのところ、この時はキトがそれを許さなかった。

「失礼します、イルさま」

例によって一度目では返事がない。が、キトはそれすらも意に介さず続けた。

「どうなさるおつもりですか」

「……買える分だけ買ったら」

しまいに、言葉を放棄した。キトはイルよりもマスクよりも大きな靴を振り上げて、全力で主を蹴りとばした。長さと高さがないが、重みはじゅうぶんだ。

「くま」

突然の反乱に驚くマスクにぴたりと体の正面を向け、キトはめったに呼ばない男を呼びつけた。めったに呼ばれないから、マスクは、はっきり目を見られているにも拘らずそれが自分のことだというのになかなか気付けない。

「お金は必要だわ。いつの間にかちゃっかり財布をひとつにしてる落とし前、今つけてもらおうじゃない」

思いがけない強気の申し出に、マスクは、おお、と呻いてからお伺いを立てるようにイルを見る。

「……いいのかい?」

イルは痛みからか別の理由からか、負傷したふくらはぎをぶらぶらさせている。まるですねた子どもだ。

「キトのことはキトが決めるよ」

ふたりのどちらも見ずに、イルは答えた。キトは少しの間その横顔を睨んだが、目が合わないと早々に諦めて、アレンカに釘を指す。

「先ほど申し上げたとおりで制作を開始して下さい。きっと全部買い取ります」

成りゆきを黙って見守っていたアレнкаは、何か微笑ましいものを見たつもりでいるらしい。

「あのね薬師のお嬢さん」

おかしそうに言い出した。

「五万オンというのはお金ならのお話ですよ。あなたたちよっぽど遠くから旅していらしたんでしょう。ここいらではお金はあんまり通りがよくないのです。他のものと交換でもまったく構いませんとも」

キトは目をぱちくりさせ、すぐに情けなそうに耳たぶを下げる。

「他のものって言ったって、なんにもありませんよ」

「あなた薬草にお詳しいんでしょう？」アレнка、とうとう笑い出す。「手伝っていただけたらおおいに助かりますよ」

能力を直接売り込むということに、キトもイルもまったく考えが及ばなかった。彼らにとっては、薬は金と取り替えるもので、労働は生活そのもので、その間に関係性はないのだった。

風の前3年 冬 タティ く働くく

「そう、あなたみたいのをハハラと言うのね。初めて見ましたよ」
薬屋の女店主と植物に親しんだ種族の少女とは、すぐに仲良くな
った。

「もちろん、聞いたことくらいはありますよ。最後まで孤立を守っ
た賢い勇敢な人々でしょう。けれどねえ、私たちみたいなのは、ど
うして早い内にザフィアに入ってしまったのかと不思議に思
っているのです。そうしたら帝国に囲われてしまうこともなかった
でしょうに」

アレンカは茶色っぽい長い草を決まった長さに切りそろえる作業
を延々繰り返しながら、いかにも残念そうにそんなことを言った。
キトには少々意外であった。

「あたしたちがどこへ暮らそうと、そんなの構わないでしょう？…
…あ、あんまりその節のところを切っちゃまらない方がいいですよ」
「あら、そうなの？」今しもナイフを入れようとしていたところを、
そつとずらす。「北の諍いはなくなるのが一番よろしいでしょう？
すると巻き込まれている人は少ない方がよろしいのです。構うか
構わないかとは別に、望ましいかどうかというお話」

「はあ、なるほど」

不干渉。その言葉が、キトの記憶の覚え書きからふとこぼれる。
それはどうやら…キトが考えていたのとは違って…無関心と等
号ではないらしい。

覚え書きに追記が済むと、キトは眼前の紙の帯に視線を戻した。
書きかけの『式』はあらぬところで止まっている。ああ、と嘆息す
る。

何をどこまで書いたのか分からなくなってしまった。

「ねえ、おばあちゃん。この後はどう続くんだったかしら」

申し訳なさそうに呼びかける。彼女が見やっているのはアレンカ

を過ぎ越した向こう側、薬屋の地下室の奥に無限のように広がっている暗闇だ。

上よりなお肌寒いこの地下室は、案外と広い。と言うよりも終わりが見えない。工房の主である老婆がめしいて明かりが不要になったとかで、アレンカの作業台周辺を照らす小さな蠟燭があるきりで、四方は闇に吞まれて消える。その闇が気紛れに凝って人の形を成したかのような老婆に対し、さすがのキトも最初は悲鳴を上げた。アレンカが「母です」と言っても、しばらく警戒した。

このアレンカの母シャンカこそが、呪い草まじなを作り得るザフィアの呪い師であり、口を開いたら娘よりさらに穏やかな優しいおばあちゃんなのだった。

「そうですね」

シャンカは暗がりでも、自分も何かしら書いている。キトとは少し離れているし、アレンカのふくよかな体が間にあつてよくは見えない。

「“朝日に背きて三度”まで来ましたようですから、“中天を遮り”と続けていただけますか？」

「はい。ありがとうございます」

キトは続きをしたためる。

それは彼女が普段使っている文字とは一線を描す。円と曲線をとらめ繋いだような、子どもの落書きのようなそれは、呪いまじなを操る特殊な文字で、ザフィアで唯一発展した真正銘の呪術であつた。ものや人の移動は北から南の一方では無論ない。ザフィアから流入したまったく新しいこの術式繰りは、エンドの呪学者の間で“グラフィック”と名付けられ、フリーの一種に分けられた。だがまだ議論途上である。何せこの文字は、それまでの通説を根元から覆したのだ。

グラフィックを実現する曲線、ヒゼン文字。それによって綴られる『式』と呼ばれる文章は、呪力を持って生まれなかった者にも呪術の使役を可能にする。キトの書いた『式』でもきちんと効力を発

揮して、ただの薬草を呪^{まじな}い草へ、呪術に起因するヒトの症状を緩和する薬へと変えるのだ。

既存の分類に当てはまるのかどうか、諸説は引きも切らない。

「聞いてもいいかしら、おばあちゃん」

ここがその本場であることに思い至って、キトの興味がにわかに膨れた。

「なんででしょう？」

「おばあちゃんには、これはどんなふうに見えるの？」

「これと言うのは、ヒゼンですかねえ」

「そう」

ザフィアの人間はシャンカのような者を呪^{まじな}い師と呼ぶが、その実はエンドやイエンゼンの呪術師と同じ。

呪術師たちの目には、『式』はくっきり他から際立って見えるということが分かっている。その見え方について語る時、彼らはちょうど『輪郭』を説明しようとするのと同じような言葉を選ぶ。

異国の地で長年この文字と触れあってきた人間が、どんな言い方をするかは非常に興味深い。

「ああ、そうそう、あなた学者さんなのでしたね」シャンカはそんなキトの興味をきちんと理解した。「空気の流れですよ」

「空気」

「そう、空気」

見えないはずの目で、老婆はしゃんとこちらを見た。アレンカの姿を透かしてキトの手元を見定めているようだ。

「たとえばあなた、さきほどからよく続きをお忘れでしょう？」

「はあ、すみません」

「責めているのじゃないの。娘も少しは書けるのですけどね、すぐ分からなくなってしまうのです。でも、呪^{まじな}い師にはそんなことはありません。流れていく方に書いていけばいいのです。それくらい、しぜーんに、すうーっと、流れて見えるのですよ」

「それは文章によって違う流れ？」

「そうですね。人それぞれ流れが違うのとおんなじ」

「人にも流れが？」

聞きかかって、すぐ気付いた。それが恐らく『輪郭』のことだろう。

「そうねえ。なかなか、見えるものを見えない人に分かってもらうのは難しいことねえ」

皮肉のかけらもなく言い、シャンカは再び手を動かす。すぐに止め、苦笑する。

「ねえ、私も聞いてもいいかしら。流れつながりなのですからけれど」

「あたしにですか」

「あの人」と、言われた瞬間キトはぎくりとする。「いったいどういう人なのかしら？」

止まってしまったペン先を睨み、キトは押し黙る。また続きを失念したからばかりではない。

相手は薬屋だ。何をどれだけ買ったかで、およそどのような症状に困っているのかは知られてしまう。

「あの男の子のこと？」

会話の間をアレンカが笑ってつなぐ。

「おもしろい子だったわねえ。なんだか一世一代、究極の選択でもするみたい」

それは割と直近の思い出し笑いだった。

「……まあ、あれはですね」内心ほっとしつつ、キトは、別の類の息をつく。「実際、究極の選択だったんだと思いますけど」

「あんたが子ども好きだとは知らなかった」

「誰が好きって言ったの？」

キトを薬草屋に残し、イルは不本意ながら、甚だしく不本意ながら、マスクと並んで畑の合間にある木陰にいた。彼がキトに巻き込まれる形でアレンカの手伝いを強いられそうになり、本気になっ

て拒否していたところ、洞窟みたいな地下室の闇の奥から突如第二の選択肢が現れた。下は五歳ほどから上は七八歳ほどの、十四人もの子どもだった。

そして彼らを見たアレンカが、急に思い出したみたいに手を打った。この子たちを表で遊ばせてやってくださいますか。いいえ、ただ見ていてくださればいいんです。なあんにもしていただくことはございませんよ。

結果、彼の目の前には今、小さな子どもがたくさんいる。

五万相当の薬を買い取ると言い張ったのはキトだけなのに、世の中とはとかく道理にもとる。

「つつたって、ましな方を選んだんだろうよ。確かにな。あんなしみったれたとこであんなふやけた麩菓子みてえな女ふたりとなんかするよりやあ、表にいた方がましだと思うのは至極当然の」

「あんたはそうなんだろうね」

洞窟は好きではないが、しみったれたとは思わないし、店主親子はいかにも波風と縁遠い善人だ。イルが薬屋の奥からまったく忽然と現れた子どもたちの相手を選んだのは、キトが勝手に暴露してしまったからに他ならない。イルが『式』を扱えるということ。つまりは、工房の作業における呪いの部分を手伝えるということだ。

「冗談じゃないよ……」

「あん？」

思わず心の声をこぼし、マスクが酒瓶を傾けながら片眉を跳ね上げる。そこへ突然、悲鳴が飛び込んだ。

「ねえっ、ねえ、お兄ちゃん！」

それはイルたちが背を預けている木の中からだった。

この辺りの季節がどう巡っているのか知らないが、木はびっしり葉を茂らせて、日を避けるのにちょうどいい。また木肌がごつごつしていて、低いところで横へ這うように枝葉を伸ばしているのので、登って遊ぶにもってこいの格好だ。そういうわけで数人が登って遊んでいたのだが、ひとりがどうやら、ふと見下ろした高さに竦ん

でしまったらしかった。一番高いところに陣取った少年たちが、顔を真っ赤にして身動きできずにいるその女の子をからかって笑っている。彼女はもはや下を見られず、かと言って上に助けを求めることもできず、枝にしがみついて必死の声を上げているのである。

イルにしてみたら、少し背を伸ばして腕を上げたら届く高さだ。

だが、傍目にどんなに低い場所でも、当人が本気で怖がっている時には無茶を言ったりやったりしてはいけない。イルはごく素直な子ども時代にそれを教わったので、染み付いた習慣がごく自然に体を動かした。すると登って行って、ゆっくり慎重に、傷のできやすい木の実をもぐみたいにして少女を助け下ろす。少年たちがしつこいのでひやかしに枝を揺らしてやろうかと思ったが、墓穴を掘ることになりかねないからやめた。

「ありがとう」

少女は無理の見える笑顔を浮かべた。なんとも答えられずに唇を引き結んでいると、上から盛んに声が降る。

「イル！」彼らは最初から、人見知りなど微塵も見せずにイルをイルと呼んだ。「助けることないよそんな弱虫！」

「あはは、こんなんで泣いてらー」

「べそっかきー」

「泣きむしい！」

「泣いてないもん！」少女が傲然と言い返す。「泣いてない！」

しかし多勢に無勢、降り止まぬはやし声に次第にしどろもどろ。

小さな少女はぐずぐず鼻を鳴らし、唯一の味方とも思っているようにイルの服の端を握りしめて黙りこくってしまう。木の上にいた間も今も、彼女はすんでのところで涙を堪えていた。そろそろその堰が切れそうだ。みるみる目が潤い、鼻がひくつき、その周りが赤らんで口が歪む。

ちよっと困ったみたいな顔をしてそれらをひとつひとつ見つめていたイルは、上にでなく、下にでなく、これまたごく自然に、呟いていた。

「泣きたきや泣けばいいよ」

細い声だったので、騒ぎたい放題の少年たちには届かなかったのかも知れない。少女の方だけが、きょとんとイルを見上げた。

「……そうなの？」

「さあ。どうだろ」

「どっち？」

鼻を真っ赤にしたまま、見れば少女はもうくすりと笑っている。

泣いていると言われたら泣かないで、泣けばいいと言うと笑う。

そう言ってみるとへそ曲がりのようだが、実際目の前にいる彼女は、イルには素直そのものに映る。そう感じる自分こそへそ曲がりなんだろうか……物思いに沈み込んでいく間に、少女は、変なお兄ちゃん、と言って木登りではない遊びの輪に加わっていく。

直後、堪えそこなった笑いが起きた。

「……なんなの？」

「いやあ」

大男は、もはや隠すこともないとばかり、おかしくてしかたないという顔をしてこちらを見ていた。

「しくじった」

「は？」

「あんたってやつは。なんだってそう難しい顔したがるんだい？」

何を言い出すかと思えば、イルはもう相手する気をなくしてしまつて、向こうの畑の脇で片足立って押し合いへし合いしている子ども達の群れに目をやった。きつと倒れた方が負けなんだろう。彼らは、どんな単純なことでも自分たちが面白いと思えば延々とやっている。「だからそういう顔して見るもんじゃねえよ」同じ方を見て、マースクがからから笑う。「ガキってのはよ」

「飲みながら子ども見てる人もどうかと思うけどね」

「いいんだよこれは。飲んで楽しくやってる方がいい。あんたみてえに辛気くさい顔して突っ立ってるよりいい」

なんだか腹に落ちないものの、そのとおりなような気もした。

「自然にしてりゃあいじゃねえか。ソロワのちび兄弟の時もそうだったし、さっきだってそうだ。にこにこしてりゃいいんだよ。人に優しくするときゃあ」

こんな男に無邪気なんて言葉を使うのもおかしいけれども、それはある意味まったく無邪気な意見だった。だから余計にやりきれない。マースクは正しいことを言っているかもしれない。が、この男の言わんとしているところを考えると、大きな間違いになってしまふのだ。

イルの声は隣にも聞き取りづらいほど萎んでしまった。

「優しくとか、した覚えはないよ」

「照れるこっちゃねえだろ？」

「照れてないけど」

「なんでえ、まだるっこしい。いっちょ、あんたも飲むか？ 人間飲むとおおらかになるもんだぜ」

「いらないよ。ていうか前から思ってたんだけど、それなんなの？ 嗅いだことないにおいするんだけど」

「あん？ こりゃあんた、知る人ぞ知るだな」

説明もそこそこにマースクはむりやりイルに瓶を握らせようとする。イルは、それが以前この男と初めて会った折り、自分がかすめとった一杯と同じ酒だというのが分かっていたので、全力で拒絶する。酒の趣味が合わないやつとは何をやってもだめだとバンスがよく言っていた。今までそうと思ったことはなかったが、この男にばかりは当てはまると言わざるを得ない。

もっとも相容れないのはこのしつこさだと、イルは心底思うのだ。

「いーるー！」

遠くで三人組が手を振っている。

「こっちの葉っぱはー？ 取っていいー？」

「いけません！」

それは先刻、別の畑の作物を摘んで食おうとした三人だ。最初はただ腹が減っただけだったようだが、イルが逐一困った顔をしながら

ら対応してくれるのが楽しくて仕方ないらしく、これ見よがしのいたずらを続けている。

絡んでくる巨漢とよさまの畑を荒そうとする腕白を同時に相手するのは、イルには少し荷が勝った。子どもにゃもてるねえ、マースクが他のものには好かれないことをつつくみたいにそう言ってますます絡んだ。

風の前3年 冬 タティ く考えるく

キトが薬草作りを手伝い、イルが薬草屋の子どもたちの付き添い兼遊び相手をし、マースクが脇からそれらを邪魔したりしなかったりし、二日間がのんびりと過ぎた。三人は薬草屋の地下の暗がりにはっそりとあった、使われていない物置のような場所を借りて寝起きた。子どもたちは別の場所でもみんな一緒に眠っているらしい。

イルはその晩、借りた毛布に包まっていつまでも眠らずにいた。窓のない場所で眠ると、色々なことを思い出す。今は横になって、夜通し灯しておく小さなランプを眺めながら、同じく深い闇と橙色のコントラストに彩られたひとりの男の記憶を思い起こしていた。と言っても、回想の主題は映像ではない。ソロワでロクーズと呼ばれる男に会って以来、イルは何かを確かめるように何度も何度も、その男の話したことを思い返している。

その男は、イルと会うずっと前から、イルを探していた。

彼が仕えていたある女の命令で、イルを探していた。

結局その男は、イルを見つけたけれども逃がしてしまった。だからイルは今、ここで自由になっているのである。時を経て、彼がまた動き出したのだとしたら。西の国の中に留まらず、ザフィアにもその手を伸ばしているのだとしたら……少々おかしい。

なぜなら、男が仕えていた主であるところの彼女は。イルを探していた張本人である彼女は、もう……。

イルはその時、ちょうどしようと思いついた寝返りを、ふと思いとどまった。

背後で、何かが動いた。

彼は部屋の一番奥に寝転んでランプをみつめている。隣、つまり三人のまん中にはキトが寝ている。入り口に蓋する岩みたいにして横になっていたマースクが、ふたりを憚るような動きで起き上がり、ひたりひたりと外へ出て行ったのである。

背中を向けていたから、イルも寝たものと思ったのだろう。明らかに、人知れずすべき何かをするために、どこかへ向かったというふうだ。情報通にも不得手な分野はあるらしい。たとえイルが本当に寝入っていたところで、もうひとりの耳をごまかせるわけがないのであるが。

「……イルさま」

「起きてるよ」

「いかがいたしましょうか」

「何を？」

「何をもって」

ハハラの優れた耳たぶは、マスクがもうここでのやり取りを聞き得ないほど遠くに行ってしまったことまで分かっているのだろうか。それとも彼女がただ迂闊なだけか。分からないが、キトは跳ね起きて、囁き声を通常の会話様に戻した。

「怪しいことこの上ないじゃありませんか。後をつけてみますか、それとも」

「いいよ。ほっとけば」

イルも声をひそめるのをやめて、きっぱり言い付ける。

「ほっとくんですか！」

「まさかと思うけど。キト、あの人のこと信用してたの？」

「そう、いう、わけではございませんけれども」

「じゃあ今さら何したって、怪しいも何もないだろ」

キトの言葉は一度途切れた。イルは戯れにランプの傘を指先でつつき、橙色の陰を揺らめかせた。背中中、少女が焦れているのを感じる。多分、言葉の続かない自分に対して。

「ただの小用かも知れないし。別に、なんでもいいけど」

イルは伸びをし、ころんと、仰向けに転がった。

キトは自分の被っていた毛布の上に正座していた。ランプの灯りを受けて、その顔ははっきり、怒っている。

「それはあまりに普通とかけ離れた考えでございます、イルさま」

「かもね」

「信用なさらぬ相手を、どうしてこんなに無防備におそばに置いておかれるのですか」

「置いてるって言うか、ついて来てるだけじゃない」

マスクがいたから、春の村にも立ち寄れたし、こうして必要なものを売っている村にも来られた。けれども、正直イルにしてみれば、イブ・クレストという名さえ教えてもらえればそれだけでじゅうぶんだった。町と町とが疎遠とは言っても、不毛地帯というわけでもなし、旅するのにそこまでひどい道ではない。彼がいることで樂ができてるのは認めるが、どうしても必要とは言えないのである。

いなくてもいい。

同時に、別に、いても構わない。一緒にいて、何をしようと構わないのだ。

「……蹴りますよ?」

「やめて」

キトは事前通告をした場合にはだいたい実行しない。が、この時は本当に立ち上がったので、イルはちよつと身を強ばらせた。

少女はそのままくると外を向き、足音を忍ばせて出て行った。

ひとりになったイルは、そろそろ眠りに入れそうな気配を受けて、そつと目を閉じた。頭の中はまるで体に反して眠ることを拒むみたいに、いつまでも思考を続けようとする。

実際、「普通」に考えたらおかしいことは山ほどある。ひとり、またひとりと消えていったソロワの貧民窟の呪力児たち。フーエンの里にふたりきりいたヒトの兄弟。アレンカを母と呼ぶわけでもないのにここに寝起きしているたくさんの子どもたち、彼らの言動の端々に表れた、この村に昔からいたのではないらしい素振り。

ソロワで繋いだ点と点とが、線になり、また別の線と繋がっていくさまを想像する。ごちゃごちゃだったそれらが次第に向きを揃え、同じ方へ向かって流れ出す。天から地へ、陰湿な冷気を伴って。

そういえば、ザファイアに入ってから雨に降られない。

翌日、昼過ぎ。予定を若干繰り上げて、キトの買い求めた薬草は完成した。いつも午前中から外へ出たがった子どもたちは、その日はなぜか姿さえ見せず、工房で暇を持て余すことになったイルはやつぱり手伝わされることになるのかと恐々としていたが、もう『式』を書く工程は終えられていた。

「はい、じゃあ、これね」

アレнкаが、薬草を一種類ずつ確認しながら渡してくれる。制作日数や値段に照らし合わせると、それはあまりにも少量に見える。小さなキトの小さなポーチにまとめて入ってしまうほどだ。

三人が早々に村を出て行くと知るや、どこに隠れていたのか子どもたちがわからわらと地下から溢れてきた。

朝姿のなかったことについて、イルは最初から何を言う気もなかったが、マスクも何も言わないのが多少気になった。どこに繋がるかまだ分からない点を内心でひとつ足しつつ、イルは低い場所にいくつも並んでこちらを見ている顔を見渡す。二日っきりの付き合いたとは言え、朝から晩まで一緒にいて、助けを求められたり過ぎたいたずらを阻止したり遊びに引っ張り込まれたりしていれば、顔なにかいやでも覚える。

思ったことは、みんな寂しそうにするんだな、ということ。アレнкаは、自分か誰かがついていられる状況でなければ彼らを外へ出さないのだ。イルという丸一日ついていられる人間を失うと、また外を駆け回れる時間が減るわけである。それは残念にも違うない。それから、ひとり、足りないな、ということ。

初日に登った木から降りられなくなった、あの女の子が見えない。「どうも、ほんとに、ありがとうございました」

キトが薬屋の親子に頭を下げている。

イルはそれを見たせい、とりあえず触れあいたい年頃の子ども

たちに両手を貸し出しながら、ほぼ無意識に会釈した。するとアレシカの母だという老婆が、滑り出したみたいな足取りで寄ってきた。子どもたちは彼女を通すために左右に割れる。老いて衰えたという目は、褪せた色をしていて、自分の顔の少し前の空間を見つめているように見えた。

キトによれば、彼女は呪術師だそうだが。呪術師の目印たる『輪郭』を見分けることができないイルには、それを確かめる術はない。「あなたね」

呪術師シャンカは、孫にでも会ったような優しい顔をした。

「毎日、この子たちを、ありがとうございました」

「……いいえ」

「とっても楽しかったですよ。ねえ」

声で、言葉で、あるいは行動で、子どもたちが同意を示す。イルはますます何も言えなくなる。

「もう長いのか？」

ふと、老婆の声が落ちる。すぐには意味が分からないで困っていると、さらに小さな声で、お葉、と続いた。

「あのお嬢さんがすっかりものでねえ。自分から言うわけにいかない、聞きたかったらあなたに直接聞いてくれってね」

あいつ、逃げたな、とそちらを睨む。イルは、別に誰に何を知られても構わないと思っている。思うことにしている、と言う方がやや真実に近いが……それでも、面と向かって尋ねられて、みずから話すのに気乗りはしない。

「七八年、くらいだと、思います」

「そう。大変でしたね」

「さあ……記憶にないところが大部分なもので」

「え？」

「いや、なんでも」

さすがに五年に渡って眠りこけていた事情までは話せない。言っても冗談になるだろう。

「諦めちゃいけませんよ」

漉き紙めいた手触りの手が、イルの手を包む。その差し迫ったような声音で、イルにもようやく閃いた。

薬草を扱う人だから、キトの買ったものから自分の症状を察したということか。

「呪いはヒトの気持ちですもの。今はちょっと捻くれて、悪さしてるかも知れませんが、いずれ必ずいい方向に向かう手だてが見つかります。諦めちゃ、いけませんよ」

あんまり真摯に幾度も励まされるので、イルはおとなしく了解しておくに止めた。それから、ふと不思議になった。

「あなたたちは、どうして“まじない”という言い方をなさるんですか」

「呪いは呪いでしょう？ あなたは別の呼び方をするの？」

「北では」

さも当然のように問い返されて、こちらも当然のごとく答えようとし、唐突に後ろ暗いような気になる。

「……“のろい”と言いますね」

自分の気持ちにたじろぎつつ言い切ると、子どもの群れの内からひとりの少年がいきなり声を上げた。

「のろいとまじないをいっしょにするな！」

「のろいのちからは」別の少年が合い言葉みたいにして返す。「セシだけのもの！」

「分かったかー！」

背の大きいのが誰かの真似をして威圧的に言うと、周囲の子たちが怖がるふりではしゃぎだす。

「まあ、それはなあに？」

逃げ延びてきたひとりにアレンカが尋ね、

「怒ったロクーズごっこ」尋ねられた女の子が楽しげに答える。「ずっと優しくったんだけどね、この時だけとおーっても怒ったの。だから、鬼ごっこ始める時、あたしたちこれ使うの」

そう、と優しく受け答えるアレンカ。部屋中を虫みたいにぶんぶん飛び回りだした子どもたちに目を白黒させるキト。イルはマスクの姿を窺っていた。彼はふやけた麩菓子と評したこの親子を本気で苦手にしているのか、挨拶が済むまで我関せずでいるつもりらしい。細長い入り口の横で、石の壁に張りついてよそを見ている。

夕べ、キトがどう行動したのかは知らない。報告がないからだ。

けれど報告がないという事実だけでも、ある種の報告になる。見ようとしたのか否かは別として、何も見なかったんだろう。

キトがもう一度礼をしたら、親子はこちらこそとても助かったと礼を倍にして返してきた。きりがないので、イルはさっさと外へ出た。マスクが入り口にひっかかるのを、子どもたちはとても楽しんだ。彼らは、畑が途切れて雑草の草原になる場所まで、三人を見送った。最後に振り返った時に見た村の遠景に、イルは違和感を覚えてひとり考え込む。男の子の声がひときわ高く、またね、と叫んだ時、ああ、馬車がないのだ、と思い至った。

風の前6年 冬 サナ く暮夜く

眠っていた、と自覚すると、イルはまっ先に自分の内側を確認する。そこにある冷たさを、ちゃんと冷たいと感じるかどうかが確かめる。

片時も放すこともできず抱え続けていると言うのに、いっこう溶け出す様子もない氷の塊は、ちゃんと、冷たかった。そのことに安堵し、消えない冷氣に絶望する。何度繰り返したか分からない一連の作業が終わると、イルは渾身の氣力を振り絞って起き上がる。二度と目覚めたくなんかないと訴える自分と毎日闘うというのは、並大抵のことではない。

記憶は外出先で途絶えていたが、そこは育った家のいつもの寝室だった。小さい頃は義理の兄妹と三人で寝起きしていた部屋だ。兄は結婚して夫婦で別の部屋、いい歳をして妹と同衾というわけにもいかず、今はイルがひとりで使っている。やや狭い寝台、タラが思春期に使っていたややかわいらしすぎる勉強机と衣装箆笥。抽斗の中も箆笥の中もほとんど空っぽだ。

机の前の窓からは、真っ黒い空が見える。

イルは枕辺の立ち上がりには掛けてあった室内用の上着を羽織り、よろよろと部屋を出た。

一階は仕事場で、家族の生活の場はすべて二三階にある。二階にはイルの部屋の他に、水回りと食堂、バンスとおかみさんの寝室がある。人の気配は、食堂にあった。

「だからですね、隊は隊、寮は寮ですが」

うんざりしたような声が聞こえてきて、それがこの家の誰のものでもないと思っただのは一瞬だった。ヤチアが、家にまで来ているのだ。

「隊に属すには寮に籍が必要でして、つまり彼はれっきとした寮属の術師なんですよ。事実上休職状態だったとは言え、手続きがされ

ていない以上辞めた扱いにはなりません」

「辞めさせますよ、即刻」

貫禄を増したタズの声が答えている。

「あいつは俺の右腕なんです。今打てないって言ってるのがなんでなのかは知りませんが、いずれ復帰してくれると俺は信じてるんだ。今まで世話になったことには礼を言います。しかしもう、おかげさまで目も覚ましたんだから、あんたたちの好きにはさせません」

「辞めるなら辞めるでいいでしょう。しかしこのままここで以前のよう生活するのは不可能ですよ。ずっとご存知だったんでしょう？ あの」

ヤチアは呆れたように正面のタズから目を逸らして、その背後、食堂入り口に佇むイルを見つけてしまった。

「ああ、イル」

ヤチアが眼鏡を直しながら呼ぶと、タズが体を返し、どこにいたのかタラが飛び出してくる。ヤチアの隣には、依然当然のようにキトが控えている。

「早かったな。気分は？」

「……いつもどおり」

「そりゃ結構。じゃ、さくさくっと用件済ませるぞ」

「用件？」

客人に椅子を勧められるという妙な展開に、イルは違和感を持たない。タズの左側に座ると、タラが熱い飲み物をくれた。湯気の温かみが、添えた指先をすり抜けて低い天井に奪われていく。

兄妹たちは用件とやらを既に聞いていたようで、ヤチアが切り出す前から深刻そうな顔をしている。

「まあまずは、改めまして。十五年ぶりかね、ちゃんと話すのは」
若いころから変わらない稚氣に細かな目尻のしわを加えたヤチアの顔は、イルひとりを見据えて笑んだ。

「遠征前に会ったよ」

「なに、お前気付いてたの？」

イルがぼそりと言ったのは、彼が十五の春、行きがかり上登城することになった際のことだ。

「それにしたって、ひさしぶりだろ」

「うん」

「ところが」

自分で作ったひさしぶりを、ヤチアは即座にひっくり返す。

「俺はぜんっぜん、ひさしぶりじゃないんだなこれが。この五年間つきっきりでいたもんでね。お前のことなら任せてって感じ」

おどけられてもイルにはついていけなかった。

「……どうして？」

「お前の治療の主担当だったから。運び込まれてきてから、お前が脱走するまで」

脱走と言われると、イルは少し肩身が狭い。

目覚めて数日のイルの記憶は峻烈な情景の飛石だ。ロンがいて、知らない人もいて、たくさん誰かが代わるがわるの会いにきた。それらの話すことを繋げていく内に明らかになった、五年という歳月の重みが、朦朧とした隙について襲いかかった。何日目だったか知らないが、イルはある夜、寝かされていた部屋を脱走していたのである。部屋どころか皇宮から、むしろ、帝都から。発見されたのはユイ草原の草の上だったそうだ。

「で、いちおう今もって主担当なんだな。冷却期間はじゅうぶん取ったろ。そろそろ仕事させてくれ」

「仕事って」

「とりあえずは説明責任を果たしたい」ヤチアの顔から、笑みが消える。「その上で今後について提案したいことがある。つうか、しないと後で殺されるからするだけさせて」

それは真面目に話す気になった顔ではなくて、彼に説明責任を課した何者かへの畏怖の表情であった。

ミチは二本の剣を携えて皇宮に戻った。アーテスとロンと予め約束した、呪術寮の訓練場へ向かう。真っ白い砂を敷き詰めた広大な広場には、雲の切れ間から吹き抜ける月が差していた。訓練の目標物として設けられている無数の的が、並んでどこかへ歩いて行く人の群れめいて黒々と連なっている。それに紛れて、ロンがばかみたいに夜空を見上げていた。そこから微妙な距離を置いて、アーテスが座り込んでいる。

「お待たせ」

ミチが力なく声をかけたので、彼らは待ち人がひと仕事終えて帰ってきたのを知った。

「……ぶっ殺さずには済んだみてえだな」

力ないなりに笑みを浮かべている友を見て、ロンがほっと肩の力を抜く。

「ぎりぎりねえ」ミチはふたりのそばへ来て、疲れきった体を投げ出した。「ああ、ぼくもしばらく剣から離れたい。ねえ、やっぱりこれは人を殺す道具で、自分を守る道具なんだよね。呪術となんにも変わらないよ。呪いっ子と台所で包丁借りた子どもと、いったい何が違うのさ。なんかもう……何言ってんだろう、ぼく」

「衝撃が強いと色々考えちゃうもんさ」ロンも隣に腰を下ろした。

「やな役押し付けたな」

「やじゃないけど」

両手で顔を覆ったミチが落ち着くまで、ロンもアーテスも黙っていた。イルに剣を抜かせよう……それは、話し合うことを拒絶するイルを議場に引っ張り出したい、それにはこちらがいかに本気であるかをぶつけてやるしかないと考えた彼らの、苦肉の策だった。いっかなこちらを向かない生意気な弟分に対する制裁、という意味合いも濃かったが。

「抜いたんだな」

しばらくして、アーテスがなんの前置きもなく言葉を投げた。

「うん」

「そうか」そして、知りたいことはそれだけだとばかりに立ち上がり、「……よし」

そのまま剣術寮のある上階へと去った。彼女の場合、ことの顛末は後でキトからいくらでも聞ける。ただ結果を聞きに、また彼女なりに友を労うために待っていたのだろう。

残った男ふたりは、月夜に並んで風に吹かれた。その内、まだ吐き出し足りないものがあるらしいミチが、また口を開いた。

「イルもきつと、同じようなこと思ってるんじゃないのかな」

「あん？」

「あいつ、自分のこと剣みたいに思ってるんじゃないかな。呪術師は結局人殺しの道具だったんだって、思っちゃったんじゃないのかな。だからもう、自分にも、剣にも、関わりたくなくなっちゃったんじゃないかって」

イルが仕事から逃げている……それを最初に聞いた時には、さっぱり意味が分からなかった。彼は鉄を打つのが好きだったし、気が滅入った時にはむしろ気晴らしにしていたくらいだったから、金床を前にして打てないと言って逃げ出したというのはどうしても信じ難かったのだ。記憶障害でも起こしてやり方を忘れたんじゃないかと思ったが、そうではない。一時的な逃避とも違う。どうやら逃げているのは、仕事からではなくて、剣そのものからであるようだ。それが明らかになると、ますます謎は深まった。

その理由付けとして、ミチの言うことは一理ある。しかし。

「あいつが自分をないがしろにすればするほど……傷つくのはア―テスだぜ。それに気付かないやつだと思うか？」

「前のイルなら、あり得ないと思う」

ミチはわざと思わせぶりな言葉を選んで返答した。

「手合わせってさ。なんかこう、来るじゃん」

残念ながら、ロンには剣での手合わせの経験がない。

「何が？」

「なんかさあ。ああ絶好調だとか、寝不足だとか腹減ってんだ

ろなあとか」

「よく分かんねえけど、なんとなく分かった。それが？」

「イルとやってる気がしなかった」

怪談の語られた後のような空気が、一時ふたりの間を満たす。

「前に、ヤチアさん言ってたじゃん」語り手のミチが怖いみたいに肩を抱く。「誰かが、間にいるみたいだって」

「あ、ああ」

「ぼくは呪術のことは分かんないけど、あの言葉の意味だけは理解しちゃった気がしたよ。時々あいつが、一生懸命こっちに手え伸ばそうとしてるんだけど、誰かが邪魔してどうしても届かないんだ。ぼくはずっと、その誰かと手合わせさせられてみたいなんだ」

ロンは自分がイルと話した時を回想した。その機会はあまりに少なすぎて、ミチのように感じたことがあったかどうか思い出すゆとりはない。

ミチが白砂を睨みつけて、か細い声で呟いた。

「ぼくらはほんとに、誰かにあいつを取られようとしてるのかも知れないよ」

「取られる？」

「ひとつの言い方だけだな」

首を傾げたイルに対し、カップに口をつけたままでヤチアが答えた。猫舌なのか、しきりに水面を吹く。

「呪術には実に多様な使用方法がある。世の悪人の数だけあくどい使い方があっていい……例えば、お前がお前であるということだって立派な否定の対象だ。分かるな」

分かったのはイルだけだったが、呪学者はそれ以上の説明を省く。「五年の研究の末、やっとお前になんかの呪いがかかってるってことが証明できた。“そいつ”はそれだけ希薄で微弱な術式だが、同時に強烈で強情だ。誰かが明確な意志を持ってお前を否定している。

予測だけど、このままほっといたら、お前という存在は消えてなくなる」

ヤチアがひと口飲み物を嚥下する音が、異様に耳についた。イルは自分のカップの縁を人差し指で何周となく擦りながら、その円の中に五年前を見ていた。少しずつ少しずつ増えていったものが、決定的にはずれた瞬間を。

「解呪の研究は始めたばかりのどこだから、全然進んでないんだけど……」

「ありがとう」

謝礼は口先を滑った。

「でももう、ほっといてだいじょうぶだよ」

「は？　なんで」

話の腰を折られたヤチアがかすかに眉をひそめている。けれどイルは、それ以上聞く気になれなかった。

「ヤチアの言ってる、誰かってのには心当たりがある」聴衆がひとり残らず目を見開いたが、イルは気付かないふりをする。「その人は、もう、この世にいないはずだから」

円の中に映りこむ影から目を背け、イルはそっと立ち上がった。

「失礼します」

引き止めたのは、それまでひと言も発さなかったキトだ。

「イルさま。心当たりとおっしゃるのはどなたのことでしょうか？　ごさいますか？」

「……誰だっていいだろう」

「その方がもうお亡くなりだと、なぜご存知なんです？」

「きみに関係ないよ」

「よろしいでしょう」

まともな返答は一切期待していなかったと当てつけるように鷹揚に受け流すと、キトは恐れのない目でイルを睨みつけた。

「ですが、もうだいじょうぶだとおっしゃるのは聞き捨てなりません。もう三月ですから、はっきりお分かりでしょう。あなたの状態

は現在進行形で悪化しているはずですよ」

「うるさいよ」

「よくそのようなことが言えますね！ 分かっているんですけど、わたくしたちは、そのまま放っておいたらあなたは死ぬんだと申し上げたんですよ！」

イルは自分でも恐ろしくなるくらい、その言葉をうざったいと思う。

「なんできみにそんなこと心配されなきゃなんないの？」

言ってしまうてから、自分の言葉に嫌気がさす。

「ごめん」それでも、思うことは止められなかった。「もう帰って……」

まだ食って掛かりそうだったキトを、ヤチアが宥めて立たせた。

また来るからな、と言い残して、その場はおとなしく退いてくれる。学術的な話になってから蚊帳の外であつた兄妹は、最後に見た光景にぞくりとし、ふたりで目を見交わしてその感覚を共有していた。相手の好意を根こそぎ拒絶する、刺だらけの言葉。イルの口からそんなものを聞いたのは、どちらにとっても初めてだったのだ。

風の前2年 春 イブ・クレスト くひとつ屋根く

刺のある言葉は何かを呪いたい人間の口をついて出る。

人は世の中にあるあらゆるものを呪う。同じ人間。国、社会、主義思想に神や概念。人外の動物、意志なき物体、またはそれらを各人なりの微妙な配分で複合した漠然とした某か……それらを呪い罵詈雑言を浴びせかける時、たいていの人間は気付かない。その言葉を吐くにおいて、たとえ自分が何に對しているつもりであろうと、対象は結局ひとつに集約されるということに。

それに気付くということこそが、あるいは、本当に呪うべき不幸なのかも知れない。

「くそ……」

今宵、その最高の不幸を識った男がまたひとり。

「ハーターに呪われちまえ……！」

星明かりも砂塵に遮られた闇の底、心得のない街の入り組んだ道の上。行く手を阻んだ壁に背を押しつけ、彼は人間が取り得るものとも醜怪な表情を浮かべて迫り来る敵をねめつけている。

敵はたったひとりで、だらりと弛緩し、かすかに微笑んでさえる。

「本気で言ってるの？ それ」

その目がつと、心から悲しげに細められた。

「哀れな種族。あんたらのためにハーターは動かない。こんなものひとつ無くしただけでもう力を操れないような、貧弱な血のためにはね」

敵が何かを片手で弄ぶ。涼やかな金属の鳴る音がする。

その姿は細く長く、袋小路の唯一の出口を塞ぐにはあまりにも頼りなかった。それでも男には、もはや逃げられるなんて甘いことは想像できない。世界のすべてから一步抜き出たような、あまりにくつきりとした存在感。敵の『輪郭』は男が今まで見てきたそれと

は違い過ぎた。

「やっぱりあんたらに、呪術は似合わないよ」敵が半身になる。「せめて最期に、過ぎた力を持って生まれた運命を呪っていきな」

不気味なほど風いでいた夜に、唐突に風が起こる。街にこの風来の異人を知る人はなく、その夜きり男がこの世のどこにも存在しなくなったことに、気付く者はない。

男の行く手を遮った壁の向こうからは、巨大な教会の尖塔がその運命の終着地を冷然と見下ろしている。

イブ・クレストは砂漠の中に忽然とある。

砂漠と言っても、その周辺はまだまだ砂地と熱帯平原がまだらに交差したような様相で、空は毎日抜けるようだが照る日は耐えられぬほどではない。それでも、人間は過ぎた暑さを逃れ、水の多いところを集まる。彼らは巨大なオアシスを囲って広がり、巨大な街を作り上げていた。

宿場通りは、オアシスから見て南西に集中している。似たような格の店はおのずと似たような場所に並ぶもので、安宿ほどオアシスから離れた場所にある。

そのふたりの男がかれこれ六年もの間借り切っている部屋は、街の西の端にあった。従って、扉は閉まりきらず、窓は枠に食われてよっぽど力を込めなければ開閉できず、床は暗黙の内に踏んではならないとされる不穏な領域を持ち、天井からは時折尋常ならぬ破裂音がした。が、ふたりのどちらもそんなことにはまったくの無頓着だったのだ。六年の間になんら不満を溜めず、ただ安く日差しと人目を凌げる空間が手に入ることに満足して暮らしているのだった。

名を、エンデルとサザンと言う。

歳のころから想像できるような、親子だとか師弟だとかいう関係は彼らの間にいいくない。ふたりがふたりっきりで、こんなに長きに渡って共同生活していることについて、当人たちが一番驚いて

いるくらいなものである。

驚いてはいるがしかし、現実はどうな想定にも勝る。彼らは今ま
ぎれもなく、同居人なのだった。

「もー、水分はまめに摂んなさいって言ってるじゃない」

老いの背中の見えはじめ、サザンがぷりぷりしながら食器棚を漁
る。ひびのあるものもないのも整理せずにいるので、いざ水を汲もう
となると、使い物になるものを探り出すのにコツがいるのである。
曇ったガラスのコップをひとつ取り、瓶につっこんで水を掬い、戻
してもう一度掬う。窓を開け放すようになってから、ほぼ十割の確
率で食器の底は砂まみれだ。

「今朝からいくら飲んだ？」

「飯の時に一杯」

「それっきり！」

彼が呆れ声を叩きつけた先には、見るからに水気の足りなさそう
なかさかさした老人がいて、自分の寝所に俯せて伸びている。

エンデルは、老いて足腰も頭もしっかりとしている。加えて好奇
心や放浪癖まで現役のままであるために、よく街中を徘徊する。し
かし体力は着実に衰えているのだ。今しがた、徘徊途上に脱水を起
こして、親切な誰かに運ばれて帰ってきた。

「いちんちコップ十杯！」

サザンは外側までずぶ濡れになったコップを無遠慮に突きつけた。
「それもいっぺんにじゃなくて、ちよつとずつよ。出歩くんなら水
筒持ってけて、なんべん言わすの。世話の焼ける」

「なに、構わんさ。貴重な水だ。先の長い者どうしで分けたらいい」
「あんたが構わないたってあたしは構うんだよ。死体処理なんか
もううんざりだ」

「さすがにひと味違うな、もううんざりか」

「笑いごとじゃない！」

普段からそう興奮しやすいたちではないと自負しているだけ、叫
び続けていると日頃の疲れがどっと出る。

「もういいわ」

傾きかけの椅子にかけ、サザンは頭痛のするようにこめかみを揉み込んだ。

「それ飲んだら大人しく寝ててよね。あたし午後はまた診療所に出るんだから」

「それがそうもいかないのだよなあ」

「なんでよ」

人様の手を煩わせてようやく帰ってきた分際でいったい何を言い出すのかと、思いつきり非難がましく言ってみたが、エンデルは意にも介さない。

「ちと、面白いものを発見してな」

「あんたが面白がってる間にかかる迷惑を知れ」

「そういう面白いとはわけが違う」

「なんだってのよ、もう」

エンデルはにやりとしたきり、身を起こしてちびちび水を含んでいる。

彼は本の読み過ぎからくる典型的な近目で、長年分厚い眼鏡を愛用していた。ここへ来て数年したころとうとう壊して、代わりを購入することはなかった。いつも顔にかかっていたものがなくなると、エンデルが存外子どもっぽい、愛嬌ある顔をしていたのが明らかになった。あの眼鏡は表情の半分を隠してしまうほどに分厚かったのだ。

別の視点から言うと、部屋全体どころか世界全体まで眺めているかのような、焦点の遠い老人の目は、実はほとんど何も捉えていないと考えられる。だから余計に、ひとりでふらふらされるのは怖い。

「なあ、サザンよ」

そろそろ出かけようかとぐずぐず考え出したころ、エンデルがまた口を開いた。

「人生とは分からないものだな」

「はあ？」

脱水で弱った老人にふいに人生を語られて、予想外の重たさにサザンは声を荒らげた。

「そう思わんか、お前。私は帝国の東で生まれて少年期をふて腐れて過ごし、機を掴んで都へ上って皇帝に仕え、何十年とひとところに腰を落ち着けていたんだぞ。山だの草っぱらだのを眺めて、書物と制服どもに囲まれて生きてきた。誰が想像しようか。こんな砂まみれの乾いたところで牛の隣に骨を埋めることになろうとは」

「なーにを言い出すかねこのじいさんは。そんなの今さらだよ。あたしだって考えたこともあるもんか、あんたみたいなのとこんなところで暮らすはめになるなんてさ」

「そうとも。本当は誰にも、何も予想などつかんのだ。今朝まで疑いもなく思っていた、今日も昨日と変わらぬなんでもない一日が過ぎていくのだなんてことも、一瞬にして覆され得る。いいかサザン、もしかすれば今日は、悠長に患者を診ている場合ではないぞ？」

「なんなの。なんかあったの？」

「待ち人来るだ」

その言葉に、いい加減不快そうなしわを刻んでいたサザンの表情も一変した。

「ひよっとすると、な」

思惑どおり相手を驚かせたところでほんとそう付け足し、エンデルは立ち上がった。普段から歩みがのろいので、のろのろした足取りからは体調の戻りはよく分らない。

「どこ行くの！」

「さーてなあ」

「三十秒！」

ここが死に場所と決めてしまった年寄りというのは、もう何者の言うことも聞かないのだということを、サザンは少し理解した。

「水筒作ったげるから。持って出なさいよ」

風の前2年 春 イブ・クレスト がある二十年

エンデルが出て行くのと前後して、サザンも安宿を空けた。安いと言ったって場所代は発生しているし、日々の生活費を賄う必要がある。彼はかつての職歴を活かし、イブ・クレストの貧しい人々や旅人を相手に施療をして日銭を稼いでいるのだ。北から流れ着いた人間の治療術なんて得体が知れないと、最初は謂れのない迫害も受けたが、今はそうしたいざごさもだいぶ減った。

「いつもありがとうねえ」

「はいはい。お大事にー」

午後一番に薬を受け取りにやってきたばあさんを診ながら、サザンは内心、仕事どころでなかった。患者が消えて好きな本をめくれる暇が出来ても、手を伸ばす気にもならない。

待ち人来る。

その言葉が、この六年だけでなく遠い昔からの、ましな思い出やろくでもない思い出を伴って際限なく心拍数を押し上げる。

実を言うと、彼はエンデルほどこの街に違和感を覚えていない。夕方遅くまでじりじりとしつこい太陽、砂混じりの風、人と同じに道を歩く角牛たちのごわついた皮膚と突き出た肩甲骨。ここは生まれ育った場所によく似ているのだ。

生まれ故郷は帝国エンド西部の砂漠地帯にあり、サザンは医者の子に生を受けた。熱帯に特有の皮膚病や熱病の患者を相手に、父親を手伝って働いている間に、自分の一生はこの土地で続いてこの土地で終わるのだと漠然と感じていた記憶がある。その予想を覆されたのは二十代の半ばのころだった。隣町に発した疫病が、サザンの暮らしていた街に襲いかかったのである。

仕事がら、多くの病人とその断末魔に関わることになった。最初はその風邪みたくで、微熱と体のだるさを訴えて自分の足で治療院まで来られるくらいだった患者たちが、やがて高熱を出し、体力

の低下から諸々の皮膚炎や感染症を併発して惨憺たる姿に変わり、意識を失ったが最後、痩せさらばえてうわ言も言えなくなる。さらに悪いことに、土地に蔓延していた砂蚤やら蛆やらが膿んだ傷口から侵入して体を蝕む。しまいに狂ったみたいな絶叫を発し、目を見開いたまま死ぬ。あんまり強く見開くせいで、死人たちの目は閉じても閉じてもかっと開く。

その死に様は見るに耐えなかったが、サザンはそれでも医者の本分をまっとうし続けた。人間とも思えないようなひどいありさまも、どんなに尽くしてもただのひとりも救えないという現実も、彼はするすると受け流すことができた。自分を薄情だと思ったことはなかったが、そういう性分だったのだろう。そしてそんなろくでもない日々の終末期に、彼がたったひとつ受け流せなかった、もっともろくでもない思い出がある。

冬。病人たちの列に、三人の親子が加わった。若い母親と、幼い息子と娘。サザンが築き上げた、「家族」のすべて。

それまで信仰心なんて持っていなかったサザンが、その時教会に彷徨い込んだ。祈ろうと思って目を閉じると、眼裏に死人たちの見開いた目が百も並んで彼を翻弄した。それでも必死になって祈っている内に、悔しくて、腹が立って、ぼろぼろ泣いていた。

死ぬのは仕方がない。生まれてしまった以上はいつか死ぬ。だが、あの死はどうだ。意識もなく、半分腐った体でただ息だけをして、自分を氣遣ってくれる周囲の優しさを感じることもできず、別れを言うこともできずに、ひとりきり苦しんで苦しんで死ぬのだ。そんな地獄が許されると言うのか。世界の流れを正すなんて言いながら、ことここまです悲惨を極めて今だ放置しておくと言うのなら。

ハーター、あんたはもう、ほんとにこの世を見捨てたんだね。

他でもない過去の救世主たちを祀っている場所で腹の底から彼らを恨み、けれど湧いて出た感想はそんな淡泊な一文に過ぎなかった。分かっていたからだ。全部彼らの責任にして罵倒して、なお彼らを頼って祈る自分の、滑稽さを。

あの疫病の一番残忍なところは、発病から死亡までの時間がとてもなく長いところだったとサザンは思う。病人もその家族も、その長い時間の間に幾度か希望を持つ。自分に限っては死ぬ前に治療法が発見されて助かるんじゃないかと、切ない妄想を抱く。そしてそんなことは少しも現実にならぬまま、ひと月が過ぎ、半年が過ぎて、別の絶望が襲い来る。医者として、また家族として看病にあたり、もとの面影もないほど無惨に爛れてしまった顔や体を隠すように包帯を巻きながら、抗いようもなく考えてしまうのだ。今さら治ったところでどうする、と。

自分ひとり健康なままで、あまつさえ家族に対して「死なせてやる方が優しいのじゃないか」などと考え、そんな自分がとてつもなく汚いものにした。どこにも救いのない最低の時間は遅々として進まず、進まないと思って何も為さずに無益に過ごす内に一年が過ぎていた。

そして再び巡り来る冬にほんのわずかに先がけて、救世主は西の街から現れた――。

「いじんせんせえ……」

窓からいきなり泣きつかれ、そこが仕事場であることを思い出した。砂漠の家々は基本的に開けっ放しであり、患者たちはあらゆる開放部から好き勝手に顔を出す。今のよう窓辺でぼうっとしていれば、扉から来るのはいつそばかだった。

異人先生というのは、ここで仕事を始めたばかりのころ街の大人たちがサザンを揶揄して使った呼び名だ。今では単なる愛称で、特に窓からご来訪の彼女くらいの子どもの場合、意味など分かっちゃいない。イジンという名前だと思っているかも知れない。

「どうしたのよ」

言いながら立ち上がって見てみれば、来客は五人もいた。よく知った近所の子どもたちで、みんなしてべそをかいている。その原因は一目瞭然だった。

むき出しの手足が擦り傷だらけなのだ。

「なあに。喧嘩？」

「ちがうよお」

「じゃあなんだ、ゴミの穴にでも落っこちたっての？」

ちよつと鼻を働かせてみる。子どもくさいがゴミ臭くはない。

「まあいいや、入んな」

こういう時、患者は確実に先立つものを持っていないのだけれど、サザンは彼らを受け入れる。子どもたちはいつものごとく窓枠に足をかけて入ってきたが、中にはそうできないほど痛がるのもあった。どうせ小さくて軽いから、抱き上げて入れてやる。近くで見ると確かに、ひっかきあい、殴りあいの負傷とは微妙に違っていた。物騒なことだが、刃物の先を滑らせたみたいな切り傷である。

何事だろう？

不穏な推測をいくつか並べながら痩せっぽちの手足に消毒液をぶっかけたら、悲鳴と抗議があがった。サザンの治療は荒っぽい。痛みの少ないようにだとか跡が残らないようにだとか、そうした配慮をいっさいしない。ただ五体無事を保てるか否かの二者択一だ。

「文句言うんじゃないよ、勝手に傷こさえてきた分際で」

「喧嘩じゃないってば！」

「風が吹いたの！いきなり！」

「風？」それは彼がした推測のどれとも違った。「風でこんなになっちゃ、おちおち表を歩けないだろう」

「だから怖いのー！」

「ね、あれ何？悪いおまじない？」

いつもは素直でないやつまでが本気で怯えているので、信じざるを得なくなる。風の正体はともかく、何か原因不明の恐ろしい体験をしたのは確からしい。

「最初っから説明してごらんよ」

促すと、五人が五人して口を開くので收拾がつかない。一番年上を指名して、質問で補いつつ聞いたところによれば、発端はひとりの男の子。五歳くらい……つまり彼らより少し年下くらい……

男の子がひとりで街をうろついていたので、彼らは声をかけてやった。砂漠の長衣をはおっていたが、頬や耳の裏が真っ赤に日焼けしていたから街の人間ではないのがすぐ分かったと言う。その子は話しかけた途端、声を上げて逃げた。イブ・クレストにはよその街からやってくる人間も多い。子どもたちは、その子も来たばかりの見知らぬ街で親とはぐれて怯えているのかも知れないと考えて、なだめる言葉をかけながら追いかけた。五歳と八歳の機動力の差は著しく、追いつくこと自体はとても簡単だったのだが。

「その子から風が吹いてきた」

追い詰められた恰好の男の子を守るような、かまいたちが走り抜けた。

「痛いし、びっくりしたし」

「気が付いたらその子、もういなかった」

「……そお」

話の間にすっかり怪我の処置を終え、雑巾で手を拭いながらサザンは不機嫌そうな相槌をする。子どもたちがそれに不服そうな表情を見せる。信じてもらえていないと疑っているのだろうが、サザンは全然違ったことを考えていた。

「他に怪我人とか、壊れたものとか、なかったのかい」

「人はいなかったんだ。裏道だったから」

「ちゃんと見なかったけど、他になんにも壊れたりしてなかったと思うけどな」

「なんでそんなこと聞くの？」

「いいや」

サザンの表情はますます曇る。

彼はヒトの医師として、戦争の前線に身を置いたことがある。数年前に終結したばかりの、俗に八千年戦争などと呼ばれるようになった泥沼の呪術大戦の最中だ。そのころの記憶の中には、ちょうど似たような風が吹き荒れている。

彼らは、あの風を知らない。

「……『癩癩』ですらない」

治療の済んだ患者たちを追い払うと、サザンは自分の左の手のひらを見つめて独り言を口走る。

「呪撃だね……」

待ち人来る。

その言葉がもう一度胸次を過った時、窓の外がにわか騒がしくなる。喧嘩の野次馬には興味がなかったが、耳に飛び込んだ単語が彼を急激に惹きつけた。

「呪術師が出たって！」

ザフィアの間人は、同じ土地の呪術師を呪い師まじなとしか呼ばないのだ。

サザンは一瞬握り締めた左手を即座に窓枠にかけ、仕事を投げ出して飛び出した。

風の前2年 春 イブ・クレスト 〳ある二十年〵 (後書き)

本作をお手に取っていただきありがとうございます。

3／11の大震災を受けてご報告です。これまで土日の定期更新を続けてまいりましたが、今話の予約投稿以後、事態が落ち着くまで更新を取りやめようと思います。主にPC作業で書いているため、やめれば節電になると思うので。

私はアクセスのある作者ではないですので、影響範囲が大変少なく済むのは救いですが、書いている私にとっては数少ない読んで下さる方々は本当に大事な読者です。その方々に心からお礼を申し上げ、勝手をお詫びいたします。

最後に（こんなところでなんですが）被害者の方々、被災された方々に心からのお悔やみと励ましを申し上げます。

それでは失礼いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6676p/>

風のたもと ～風の年～

2011年10月6日10時37分発行